
問い「探しものは何ですか」 答え「転生前の友人です」

さんすべりあ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

問い「探しものは何ですか」 答え「転生前の友人です」

【Nコード】

N4045Y

【作者名】

さんすべりあ

【あらすじ】

防御区の外では妖獣が暴れる世界——あるいは時代。主人公は最年少で妖獣を狩るライセンスを得たハンターである。昼は学校、夜は狩り。そんな彼は自分の名が広まることで、友人が会いに来てくれるのを待っていた。

――初投稿なので、温かい目で見ただけとありがたいです。いろいろ王道のはず。たぶん。違うかな。

ブローグ

ひとつの影が木の下に振れていた。

ゆらり、ゆらり。

木の幹にいた小さな白いものは、たった今それに気づいたようにふつと頭を上げた。黒目しかないつぶらな瞳が、振り子時計のように揺れる影を追う。ゆらり、ゆら。

首を傾げた小さなものは、冷たい朝の空気にぶるりと身を震わせると、苦勞して右前肢を伸ばした。次に左後ろ肢。ぴんつと四肢をつつぱると、一気に木を駆け登った。幹から手前の枝に跳び移り、影へとつながる一番近い位置へと走った。

そして縄は無視して、枝から直接影へとダイブした。

その時、朝日が影を照らした。

長い、膝まである長い髪 of 若い娘の顔が白い靄の中に浮かんた。

深く刻まれた苦悶の表情は、爽やかなはずの朝日さえ葬送の色に染め上げた。靄と早朝の光を死装束に変えてまとった娘は、首を吊った際に吐いたのか口元を汚していたが、そうであってさえ厳肅さは失われもしなかった。

白いものはしつぽでバランスをとりながら娘の頭から肩へ跳び回っていたが、彼女の顔に小さな鼻を寄せてフンフンと嗅ぎ出した。そしてカリツと引っかくと、興味を失ったように離れて行った。

健康のために毎朝走っているメタボリック気味の男性が、その木の植えてある神社の境内にさしかかって悲鳴を上げる頃には、その白いものはどこかに去ってしまっただけで誰にも見つけられなかった。

1 卒業式は欠席しました。

「まどかー。聞いたか？ たじまりようこ 田島涼湖の呪い」

突然後ろから声をかけられて、まどかはうるさげに白鳥へと振りむいた。

どことなく険悪な視線を向けられた白鳥はそれでも粘り、ねば手近な机の上にあぐらをかいて、悪意のない笑みを見せる。

「なんでお前がここにいんだよ」

「はっはっはー、驚いたろ。大成功。一日遅れの卒業証書もらいに来た友人、一名様ごあんない。それよりさ、聞いた？」

懲りない男だった。

不機嫌になって、まどかは見納めとなる中学校の教室に視線を逸らせた。

不登校その他で卒業式に出席しなかった生徒は何人もいるが、さらに不都合な理由で出席できなかった生徒もいる。まどかと涼湖と、その涼湖の呪いで殺されたと噂されている女子二人だ。

まどかはハンターの仕事で、涼湖と女子たちは自殺で。いずれにしても、一般生徒の保護者は眉をひそめたはずだ。

「あれ？ まどかって田島と知り合いだった？」

逸らせた視線を追った白鳥が、彼女の机をじっと見ているまどかに気づいてとぼけた声を上げた。

「……友達っていう意味じゃなければ、知ってる」
誰だってそうだ。

「それにしても、ヒトが三年間の思い出に浸ってる時くらい、気をきかせて黙ってて欲しいんだが。お前にそういう気づかいを期待するのは、やっぱり無理なのか」

「まどかが浸るってナニ？ 本気が、正気が、ありえない！」
黙っていて欲しくて適当に言ったら、さらに騒がれてしまった。

もうコイツには何も期待するまいと思いつつ、溜め息をつく。

だが、そんなとぼけた友人に、涼湖の机を見ていたのを気づかれるとは思わなかった。安全な場所だと気を抜いていたせいだ。隙だらけだったかもしれない。

涼湖は全校生徒どころか、区内でも知らない者のいない有名人だった。

悪い意味で。

腰を越えた長い髪と切れ長の目をした彼女は、まるで平安時代の女のようなだった。彼女を見かけるたびに雛人形を思い出したくらいだ。

もともと涼湖は、まどかが見ているなどとは思わなかっただろう。学校ではいつも数人の信者の熱心な瞳に囲まれて、さらに一般生徒のうさんくさげな視線にさらされていたから。

霊能力があるという噂だった。

無くした物を捜しあてたり、事故を予言したと聞いた。

だから一度、まどかは信者を押しのけて彼女の正面に仁王立ちになつてやったことがある。

『オレは円城円。^{えんじょうまてん}ハンターとしての名は静義^{しやぎ}』

勇猛で知られるハンターのライセンスを持つことはどうしてもよかったのだが、反応を見たくて名乗ってみた。しかし残念なことに、彼女はまどかの期待を裏切った。

『あたしは巫女。加護を望むの？』

涼やかに微笑んだ表情はそれらしかったが、求めているものとは違った。

彼女は静義の名も氣にとめず、望むものも当てられなかった。

『ハズレ』

彼女の信者に無礼だと一斉に非難されたが、氣にもならなかった。席に戻る。内心へこんでいたのは、仲のいい三村の他に誰も氣づいていない。

『何しに行ったわけ。探し人だと思ったの？』

『……ちよつとだけな。そうでなくても、アイツを見つけてもらえるかと思った。でも、ダメっぽい』

あれなら山桜桃ゆすらの方が上だ。そう思つて頼杖をつけば、勝手にため息が出てしまった。

三村が肩をすくめてメガネのブリッジを押し上げた。

『声かけたんだから、ちゃんと説明して、形だけでも探してもらえばいいのに。あれだと、田島さんのとりまきの恨みを買つかもよ』
『もう関わらない。一回話しかけただけで恨まれてたまるか』

『円城くん、君自分が目立つって分かってないの？ 普通に話しかけるならともかく、女子的には今の、充分にイベントだったよ。だから、恥をかかされたと思われるかも』
『知るか』

三村の懸念けねんは取り越し苦労で、信者がまどかに言いがかりをつけてくる事はなかった。

霊能者と公言する涼湖のことは、それで苛められたりもしてるんだから言わなきゃいいのにと気にはなったが、イベントとまで言われると二度も話しかけるのも躊躇ためらわれた。彼女は孤立していたから、たった一言の忠告でさえ目立つのだ。

いつもまとわりついている信者以外、生徒はみな涼湖から距離を置いていた。

当然といえば当然だ。

自分の常識と違うモノを拒否する大多数と、周りを知らうともしない涼湖。

どっちにも共感できなかったから、まどかは放っておいた。

そして――涼湖は卒業を控えたある日、首を吊った。

その日から彼女の呪いという噂が流れ始め、今日に至る。

1 卒業式は欠席しました。（後書き）

初心者です。見やすさとか、こんな感じで大丈夫でしょうか。
ひとこといただけると喜びます。ぺこり。

2 あいつにここにいてほしい

「昨日、安部が死んだんだってさ。いじめに加わってた女子グループの。前の一人と似た感じで、錯乱さくらんして走り出して、ベランダから飛び下りたんだって」

放っておいて欲しいのに、おしゃべりな白鳥はまだ勝手に話していた。

「卒業式当日つてもも凄いやなあ。涼湖りょうこってホンモノだったんだって、今さらびっくり」

こっちは、お前がここにいることにびっくりだ。卒業を惜しんでくれる下級生ならともかく、男に待たれても嬉しくない。

「うざい。わざわざ卒業後の学校までそんな話をしに来たんなら、よっぽどの閑人ひまじんだな」

「何だよ、まどかだって妖獣をざくざく殺してるくせに。人の死に興味本位で語るなとか言う？ こんな時だけカッコつけんたって」「あれは『殺す』じゃなくて『倒す』。生物ですらないんだから」

三年の教室を出て昇降口に向かうまどかを、白鳥がバタバタと追いかけて来る。

この友人に悪気はないのだが、空気を読む力もナイ。

聞いた話だから本当かどうかは知らないが、涼湖が自殺した理由

は最低だった。顔とノリがいい女子グループが、かなりひどい事をしていた。

それを知ってさえ平気で噂話ができる白鳥の神経は、きっとまだかより太く、粗い。

「って帰るなよ。円城センセ、待ってー。違うの、俺こついう話をするために来たわけじゃなくて、本当は三村たちとか皆で卒業パーティしようって誘いに来たの！　きれいどころの女子もいるし、用意はできてるし、だから三村ん家いこう！」

階段を駆け下りたついでにコケて最後の二三段を滑り落ちた友人に手を貸して、まどかは眉をしかめた。

「だったら最初からそう言えって。誘いに来る人選まちがってる。迎えが白鳥だったら話がずれまくるって、分かるはずなのに」

「ひでえ。まどかまでそういうコト言う？　せつかく同じクラスになったよしみで友情を深めようとしてる、この俺の優しさを理解しろ」

「高校か？　お前と同じクラス？」

二人で連れだって中学校を出ると、体育の教師が手を振った。会釈程度に頭を下げるまどかと、両手を大きく振り返して「また遊びに来るっす」とはしゃぐ白鳥。

まったく性格の違うコレと一年付き合わされるのかと思うと、今から疲れる気がした。

白鳥は一応イイ奴だが、隣にいて欲しいとは思わない。できるなら無関係な、遠い遠い場所で幸せになってもらいたい。

そんなまどかの気持ちも知らず、彼は元気よく初春の街を歩く。

「ガッコから通知来たろ。二組つて、三村に聞いたぞ？ 男は、俺とまどかと三村と山本が一緒。よろしくな」

「山本もかよ」

若干声が低くなったのを察して、白鳥が慌てる。

「さすがにあいつは呼んでないから。大丈夫だから楽しもう！ な？ な？」

「分かったからそこまで気をつかうなって。オレどれだけ危険人物だ」

「いやいや、事実キケンなハンター様でしょ」

「人間相手には無害だっつの」

どこまでも墓穴を掘らずには済まない友人を、もらったばかりの卒業証書（缶入り）でポコンと叩く。

大げさに騒ぐ白鳥の相手をしていると、神社にさしかかった。

——涼湖が自殺した場所だ。

思わず足が止まっていた。

今はもう何もかも片づけられていて、境内は芽ぶきを待つ風情し

かない。死の匂いもなければ、どの木に首を吊ったのかも分からない。

当然だ。

普通とは違うが、まどかは霊能者というわけではない。

それでも、どうしても気になった。

今ここに探し人にいて欲しいと思った。

「……まどかつて、田島が好きだったとか？」
「ハズレ」

もう一度卒業証書で白鳥の頭を叩くと、まどかは先に立って三村の家へと歩き始めた。

3 はんたー+はんたー

数日後の夜。

かすかに物音がした。まどかは曇って星の隠れた空から視線を戻した。

防御区の中ならともかく、外で気を抜くことはない。近づいて来る足音。異質な気配。

三匹が同時に飛び出してきた。

集団で移動するのがこの妖獣の習性だったから、予想の範囲内だ。さらに言えば、最悪の事態として十数匹を予想していたので、数が少なくてちよつとだけ安心した。

狙って来たとはいえ、コレと戦うのは初めてだ。

まどかはすでに抜いていた剣で一匹に斬りつけた。表面が硬くて一瞬刃が止まったが、踏みしめる足に力を込めて体重をかければ、水晶みたいな音を立てて碎け散った。あとは勢いのままに断つ。

断つというより叩き割るといった方が正しくて、刃こぼれした感触が手に伝わって来た。

「あーあ。せつかく砥とぎに出したばかりなのに」
返した刀で、ミラの魔法と拮抗きうかう勝負をしていた妖獣を両断する。

「砥いだけで斬れる方がおかしいって分かってる？ てか、どう考えても物理攻撃すべき相手じゃないから。ふつうは高位魔法で退治するモノだから！ ああもう、怖かったーっ？」

そこまでの大技を使えないミラは、額にびっしりと冷や汗をかけたまま文句を言った。

「だよなあ。それを一撃で倒すお前ってどうよ」
廃墟の崩れた石柱の上にあぐらをかいた鬼灯きぢょうとうが、呆れたように咳せいがく。

彼も大刀を使うが、その妖獣を倒すのは明らかに面倒とわかっていたので、座って楽をしていた。

が、もう一匹の妖獣が、彼の妹のいる別の石柱の上に向かって行くのを見て、立ち上がる。大刀をふりかぶって柱から飛び降りると、重力を利用して妖獣の背中に一撃を与えた。亀の甲羅かひらのような外装を、加速と重さで押し潰す。

「ありがとう」

少女の濡れたように黒い瞳が、笑みの形に細まる。かぼそい声で山桜桃ゆすらは言い、詠唱をやめた。途端とたんに、まどか達を包んでいた能力増強の力場が消える。

「まあねえ、狩りに引っ張り回してるのは俺だし。ここで山桜桃に

ケガさせちゃったら、お兄ちゃん失格」

「このシスコン。ちよつとは静義しやぎを見習みまったらどうなの。女を地面で戦わせて自分は安全地帯あんちたいって、ありえなくない？」

げし、とミラが鬼灯の背中に蹴りを入れたので、鬼灯は石の断面に似た妖獣の死骸に顔からつつこんだ。容赦ようじやない。

「ひどいなあ。だって俺、こんなのに直接向かったって役に立たねえもんよ。しかたないだろ。これも作戦」

たつた今その妖獣を倒したのだから、役に立たないはずはない。割れた外装に余裕でもたれかかってヘラヘラ笑う様子は、ミラでなくてもツツコミを入れたくなる。

「偉そうに言うな——っ！」

案の定、ミラはきつくカールさせた金茶の髪を振り乱し、げしげしと彼を蹴りはじめた。

「ぼうりよくはんたいい」

「ふざけんな——っ！」

「……よく飽きないな」

魔法が専門の女性なので蹴っても痛くはないし、鬼灯も分かってやられているので、まどかは口を出したりはしない。この二人はいつもこんなふうで、冗談で本気を隠したり、無言の了承のうちに実力全開のケンカをしたりしている。

ハンターが全力ってどうだよ、と思ったりするけど。心配するだけムダだ。

それでも山桜桃だけは石柱の上でおろおろしていた。

他人の感情より先に『力』が見える彼女には、そのケンカが『力』の暴発と感じられているのかもしれない。薄い肩をさらに小さく縮めて、両手を組み合わせている。

人とは交わらない異質な美をもつ彼女のそんな姿は可憐だと思わなくもないが、小さな村なら一匹で破壊する妖獣を目の前にしても平気で詠唱できるのに、兄と仲間のふざけたケンカに涙目なのは、こっちもこっちで何か間違ってる。

「——北部二〇七番隊、静義^{しんぎ}。絡居^{かゑ}の森で甲犀^{こうじ}を三匹退治した」
いずれにしても心配するまでもない三人の日常は放っておいて、まどかは国家保全局の支部へ連絡を入れた。

ここで名乗り、仲間が呼ぶ『静義』という名は、彼が狩りに出る時の登録名だ。

『ミラ』や『鬼灯^{きとう}』も同じく登録名称だ。
一人では危険な狩りを成功させるためにハンター同士組んだだけのチームだから、まどかは彼ら三人の本名を知らない。

二年前、それなりに成長して戦えるようになった時、まだ中学生の自分を受け入れてくれるハンターはいなかった。

ただでさえ死と隣り合わせの上、ほとんどのハンターは狩りを職業として行っている。

仕事に、足手まといになりそうな子供を連れて行く大人はいないだろう。唯一受け入れてくれたのが、鬼灯たちだった。

鬼灯は、子供を一人で狩りには行かせることはできないと職員に登録を拒否されていた自分の肩をつついた。——うちに来なよ、と。

予想より全然イケメン！ とはしゃいだのはミラで、山桜桃は鬼灯の後ろに隠れながら自分をひっそりと見つめていた。

その物静かで臆病な少女が自分を誘えと二人に言ったのだとは、後から聞いた。

強い『力』を持つまどかがいれば、兄やミラが狩りで傷つくことはないと思っただけ。魔力の鑑定をする人間はいるが、生命力こみでの『力』を感じられるなんて聞いたことがなかったので、初めは単純に驚いた。

そして今は、こっそりひっそり頼りにしている。

自分を見つけたように、もう一人見つけないだろうか、と。

『甲犀を、三匹い？ 相変わらず凄いな。甲羅はお前らで持ってくるか？』

雑魚ならいざしらず、大物妖獣である甲犀の輝く外装は貴重だ。

宝石としても価値があるし、その硬さを活かした素材となることもある。

「重いから回収に来て欲しい」

けっこう大きかったので念のため携帯カメラを甲犀に向けると、まだそこにもたれていた鬼灯がVサインを出した。ケン力を一時中断して、ミラも可愛らしくポーズを決めたりする。

「……りょーかい。成獣なわけな。料金は報奨金と外側売った代金から引くって事で、軽トラまわすから」
「よろしく」

その会話から時間がかかりそうだとふんだのか、山桜桃が短い詠唱で妖獣避けの祓いを行った。

兄が彼女に手を差し伸べると、その手につかまり、よろけながら柱から降りて来る。

そして背負っていた羽根モチーフの飾りのついた鞆から、レース模様のペーパーでラッピングした手作り菓子を取り出した。

4 戦場でお茶会を

出てきたのは、山桜桃^{ゆすら}手作りの菓子である。
今日はドライフルーツが入ったパウンドケーキとココアクッキー
だった。

ドリンクボトルから紅茶まで注いで用意するので、場は緊迫した
戦場から一転して、お茶会になる。

「仕事の後の一杯はうまい。ねえねえ、コレどうやって作るの？
なんか本格的な味」

「そこで『ぷはー』とか言ったら、オヤジ決定。俺、潤^{うる}いのないチ
ームなんて嫌だなあ。ついでにコツ訊いたって、作んないのに」

「うるさい・うるさい・うるさい。鬼灯^{きぢよう}は黙ってお菓子食べてて！
あたしは山桜桃にきいてるの！」

ミラは手近にあった物を投げつけようとして、それが甲犀^{こうじ}の欠片
だと気がついて手を止めた。きれいーと言って、嬉しそうにデニ
ムのミニスカートのポケットにしまっている。

「……そういうトコは女なんだよねえ」

褒^ほめているのか貶^{けな}しているのか微妙な口調に、またミラがムツと
顔を上げる。

さわらぬ神に祟^{たた}りなし、である。まどかはクッキーをつまんだ。
甘い。だが、戦闘でとがった神経を休めてくれる。
「うまいな、コレ」

「良かった」

また二人のケンカにオロオロしていた山桜桃が、小さな笑顔を見せた。

「……」

明らかに年下の二人の方が落ち着いていて、——そしてこのままだと確実にまどかが菓子をすべて食べつくすと思われるで、ミラと鬼灯は口論をやめた。急いでクッキーに手を伸ばす。

「成長期は分かるけど、一人で食うなって。そういえばお前、明日から高校なんだろ。こんな夜中までうるついてていいのかあ？」
「別に。どうせ入学式と簡単なオリエンテーションだけだし、寝てもあんまり関係ない」

「いやソレ間違ってるから。オリエンテーション聞いとかないと、正しく単位とれないから。困るから」

「それは大学だろ。鬼灯の実体験？」

「なになに、鬼灯ったら留年の危機なの？　もしかして来年度はあたしと同級生？　ウケるー」

けらけらと甲高い声で笑ったミラは、大物をしとめてハイテンションになっているのかもしれない。バンバンと鬼灯の背中を叩いて笑い続ける。

「あの、ミラ。お兄ちゃんをいじめるの、やめて」

山桜桃が、半泣きでようやく言った。

ミラは今度は少女の首に腕を回して引き寄せ、ストレートの黒髪

をぐしゃぐしゃと撫^なでまわした。笑顔の相手に抵抗もできず、山桜桃は硬直している。

「いじめてないいじめてない。大丈夫よお、鬼灯、頑丈^{がんじょう}だから。それよりお兄ちゃんが留年^{りゅうねん}って嫌じゃない？」

「まだ落ちてないから！ 泣き落して履修^{りしゅう}届^{とど}を受け取ってもらったし、明日の再々試で受ければ三年になれるし。だいたいお前、保全局から声掛^{こゑか}かったんだろ。無試験でキャリア待遇^{たいぐう}って。ソレ蹴^けってうちみたいな二流大学に来るなよお」

ミラの瞳がずっと細くなった。

彼女は唇を尖らせ、これみよがしに山桜桃^{ゆすい}に抱きつく。

「キャリアなんて、保全局もあんたもバカみたい。分かんないの？」
彼女が不機嫌なのはわかる。

「必要なのはあたしじゃなくて、北部二〇七番隊の人間。うちのチーム、短期間に凶悪妖獣をざくざく倒しちゃったから、目立つちやったのよね」

小さな少女はなんとか脱出しようと、ぱたぱたと手足を動かしたが、そのくらいでミラが放すわけがない。ますますぎゅっと抱きしめている。

美女と美少女なので絵柄としては文句なしだが、ミラの瞳にあるのは、その評価がつまらないと思っっている冷静な色。

仲間をからかうフリでもしていなければ、やっていけないのだろつ。

「今日の狩りもそうだけど、ハイレベル危険バシバシな場所に行きたがって妖獣倒すのは静義しやぎじゃない？ あたしなんて、入局したって即戦力にならないってすぐに切り捨てられるわ。それくらいなら、大学行って自力で就職でもなんでもした方がマシ」

彼女のプライドが傷ついているのにやっとなづいて、鬼灯は慌てる。

彼はハンターとしての実力もあり、作戦を立てる時は思考も回るのに、こういうところは少し鈍い。

でもたぶん、その鋭さと鈍さのアンバランスをミラは気に入っているのだと思う。

実は自分もだ。まどかは小さく笑った。

「お前なあ、自分が原因なのにそこで笑いますか」

「ミラは分かっている。オレがどうこう言わなくなったら、折り合いなんてちゃんとつけてる。謝ったらきつと殴られる」

それとも（比較的無害な）戦闘中に、蹴られるか踏まれる。

「良く分かっているじゃない。でー？ 静義って、どこのガツコ行く

の」
「南東北」
みなみとうほく

パウンドケーキを一口で食べながら答えるが、ドライフルーツが歯にくっついてしまった。しかもとれない。ちょっと不幸。

「西ナシ高かあ、ウチらの大学から近いね」

「それで選んだわけじゃないけど、募集人数多いから楽に入れるし」

どうせくつついたんだから一個も二個も同じだと、両手に菓子をキープしてみる。

食べるたびに歯にくつつくモノが増えたが、後で気にすることにしよう。

「だったら、道ですれ違ったりするのさ。もし声掛ける時、静義でいいか？」

思いついて、鬼灯が顎に手を当てて尋ねた。

ハンターであることをオープンにしているならそれでもいいが、隠している人間もいる。

ハンターとしての自分と、防御区域内部での自分を分けて暮らしたい者もいるからだ。

防御区域内で暮す人間の中には、凶悪な妖獣を倒すハンターを粗野で怖いだけの存在として考えている者もいる。

それが恋人だったり上司だったりしたら、狩りの仕事をしたくても遠慮する人間が出るかもしれない。

できるだけ多くの人間に妖獣を退治してほしい国家保全局は、そのへんまで考慮してみたわけだ。

お役所仕事のくせに細かい。

もっともその配慮は、人間の生活空間を荒し甚大な被害を出す妖

獣に、本気で困っているという証しでもあった。

「それとも、あたし達にも内緒？」

「や、そんなこと無いけど。オレ、本名は円城円。えんじょうまてが内部で会う時は、まどかで頼むわ」

「お兄ちゃんたちはそのまま呼んで大丈夫。もちろんわたしもね」

本当の名前・真名まなを使ったほうが魔法関係には＋0・1くらいの修正がつく。生活空間での人間関係に問題がなければ、山桜桃とミラは登録名を実名にしたほうが効率がいい。

「静義、うつん、まどか君……ハンターなのを、隠してるの？」

ミラの腕から脱出するのは諦めて、次々と菓子を食べる様子を見ていた山桜桃が首をかしげた。

5 探し物はなんですか

「いや。隠してんのは違うんだけど、人探しの一環で」

「ああ。なんか言ってたねえ」

ポンと手を打った鬼灯きらぎょうを、ミラがどついた。猫に似た吊り目が光る。

「『なんか』じゃないでしょ。中学生がカラダ張って人探ししてるのに、忘れんなドアホ」

……ミラは大阪人なのだろうか？

かなり激しいツツコミに苦笑いし、まどかは山桜桃ゆすらから視線を逸らせた。

探し人の話が出た時の少女の寂しげな雰囲気は、自分が原因だと分かっていてもどうしようもない。

まだ、話したくない。

彼らを信じているつもりだが、全部を打ち明けたら正気を疑われそうで嫌だ。

そう思うこと自体信じられていないと、山桜桃は悲しんでいるのだろうけれど。

「だって詳しく聞いてないからなあ。確か、名前がマスコミに取り上げられるくらいになったら、会いに来てくれるかもって言ったけど」

「覚えてんじゃない。だったら、どつかせるような発言しないでよ」

「イヤ、今のミラじゃなかったらどつかないって」

またもやケンカが始まりそうだったので、まどかはナイナイと手を振ってみた。無関係な時なら放っておくが、自分が話題の時にやられると話が終わらなくて困る。

「日常的に呼ばれて、本当の名前って誤解されたら無意味だから。

『まどか』が『静義^{さやま}』を名乗る理由ってトコに気づいて欲しいわけ」

「結局説明になってないわよ。なあに、生死もわからない生き別れの家族でもいるのー？」

明らかに信じていない口調で言われた。

まどかは首を横に振った。

ベタすぎる。何時代の感動ドキュメンタリーだ。

「家族じゃないけど、生死は不明かなあ。万が一生きてたとしてって、ここにいてどうかなんてゼーんぜん分かんないし」

「……それ、売名行為の意味あるのかなあ」

鬼灯に考え込まれて、まどかはまた首を振った。

「いいんだ。やれる事をやっておきたいだけだから」

たぶん自分でも、本当に会えるとは思ってない。ただの自己満足だ。

「もし会いに来てくれたら、どうするの？」

惑^{まど}う声で山桜桃に訊^きかれた。

「どうもしない。ただ、いるなら会いたいだけ」

まどかがあつけらかんと答えると、山桜桃が細い眉を寄せ、ミラが深いため息をついた。

そして鬼灯は女性二人の様子にきょとんとして、良く分からないからまあいいかあ、と菓子をつまもうとした。が、クッキーもパウンドケーキも、もはや食べカスしか残っていない。

「静義……」

「食べたかったら、キープしとけて。誰も食べなかったら、いらないと思うだろ？」

「その前にお前が全部食ってるんだ！ 返せ、山桜桃の手作りをかえせええつ」

妖獣しかいないはずの廃墟にむなしい遠い吠えが響き渡り、甲羅の回収に来た業者をびくつとさせた。

*

その夜、また一人少女が死んだ。

同じ中学、同じ人物をいじめていたという共通点を持つ被害者として、三人目。

その窓辺から、白い小動物が走り去って行った。

6 高校の入学式には出れました

入学式はあいにくの雨だった。

「寒っ」

「そりゃ、そんな格好かっこうしてれば寒いだろうよ」

白鳥は、デザインはいいが薄いコートを着て来た。まどかが腕を上げることで友人を引きはがすと、彼は今度は反対隣りにいた三村にくつついて熱をもらおうとする。

「だってイイ女がいるかもしれないねーし。第一印象って大切だろ」

「だったら服より行動に気を配れよ。ガキみたいにはしゃいでる時点で、マイナス評価されんじゃないのか」

言いながら、三人で始業式が行われる体育館へ向かう。

南東北高校は防衛区域では最も学生数の多い高校なので、小学校や中学校で一緒だった学生が確実にいる。

「まどかに言われると、三村に言われる三倍くらい腹立つぞ。凄腕すいひでハンター様でその外見、努力しないでモテる男に俺の気持ちはわからん。俺はしゃべりと優しさを強調していくのだ。実に正しいアプローチ。さすが俺」

「白鳥くん、今まさに君が僕を三倍けなしてるって理解してる？」

体育館にはすでにたくさんの学生が集まっており、騒いでいる三人には迷惑そうな、あるいは面白がった視線が注がれる。ついでに、

話す内容が聞こえた生徒達は驚きの表情を浮かべている。

「ハンター？ 高校生で？」

「知ってる。一中の生徒で最年少のがいるんだって」

「すげえな」

「やだ、怖いって。あたし小学校一緒だったけど、今はもう近寄れないよお」

ざわめきは、大多数という仮面の下に隠れて発言者の特定はできない。

まどかも誰が言ったかはどうでもいい。無責任な憧憬も忌避も、求めているものとは違う。

探し人が自分の名に気づいてくれればいいとは思うので、そうして噂が広まっていくこと自体は満足だ。

事前に通知されていたクラスを探して歩いていると、そういえば、と白鳥が周囲を見回した。

「山本見てねーけど、しょっぱなから遅刻？」

「さばりじゃねーの？ あいつ、学校なんてどうでもいい派だろ」
三人と共に同じ中学出身で同じクラスになっていた男子の名をあげた白鳥は、もう一度左右を見回してから、探すのを断念した。
もしいたにしても、人が多すぎて見つけるのは困難だ。

まどかは最初から探す気などない。

山本はまどかがハンターをしているのが気に食わないらしく、
機

嫌が悪そうな時に会つとイヤミを言われた。

さすがにケンカを売って来ることはなかったが、そんな相手の出欠を気にかけてやる義理はない。

「一目目にさぼりだと、女子の印象が悪くなるのに」

「白鳥くん、君の頭の中にはそれしかないのかい」

「ない」

断言されて、三村はため息でメガネを拭いた。

聞こえていた女子がくすくすと笑っている。気づいた白鳥がぱつと笑顔を向けた。

「どうもー。ね、ここって二組？ 三組？」

「二組」

ノリの良さに苦笑した女子の一人が律儀りちぎに答え、彼女の前後に並んでいた何人かが互いに笑いあう。女の子同士の、無意味で防御的な、コミュニケーションツールとしての笑い。

「やっと着いたー。入口からここまで長かったー。あ、俺たちも二組」

よろしくー、と自己紹介を始めた白鳥を置いて、まどかと三村は男子の列に移動しようとした。

が、友人の手がコートをつかんでいて放さない。

「……」

巻き込まれて一方的な紹介をうける二人を、女子の一団がまたくすくすと見ている。

何人かの視線が好意的に動き、まどかと三村は互いに肩をすくめ

あつた。

女子にモテたいなら、自分たちは明らかに邪魔だと思うのに、白鳥はこうしてグループ作り（最終目標はもちろんオツキアイだ）を目指して自滅する。

「あたしは加賀森かがもりほのか、向中むかいちゆうだよ。こっちは江上えがみふゆ冬ね。隣が区立中の湊奈波みなとななみで、その隣が」

加賀森という、はじめに白鳥に答えた少女が周囲の女子を次々と紹介してゆく。

女子の方が男より集団を作るのが早いのは自明だが、入学式が始まるまでのわずかな時間にこれだけの名前を覚えるのは才能だ。

しかしまどかは、感心するより顔をしかめた。

「冬って、春夏秋冬の？ オレ、ハンターの登録名は静義しやぎってんだけど」

茶色つばい髪の小さな少女は、困ったように視線を落として加賀森に身を寄せた。

「なあに、円城くんって冬みたいのが好みなの？ そっじゃなかったら、迂闊うかつに声をかけるのはやめてよね。世の中は草食系主流なんだから」

だからこそお役所が登録名にまで気を配るのだ。

ハンターというのは白鳥がしゃべったので、乱暴なのが苦手な女

子は、すでにまどかと精神的に距離を置いている。逆に気にしない女子は興味を持って観察してくる。

冬という女子は前者、そして加賀森は後者だ。

「珍しいね、円城くんが初対面で気にするなんて」

「一目ぼれか？ まさかそうなのか？」

三村が冷静に指摘し、白鳥が調子に乗って騒ぎかけた。

楽しそうな女子と、友人をかばう加賀森のにらみに負けて、まどかは両手を上げて降参した。女子に騒がれそうな時にはこうするのが一番だと、鬼灯とミラのやりとりで学習している。

「そうじゃないって。はいはい、スミマセン。誤解させたオレが悪うございました」

完全に加賀森の後ろに隠れた少女にぺこりと頭を下げると、本人の代わりに加賀森が笑った。

「誤解はしたのは、その若干一名だけ」

「って俺？ ほのかさーん、それキツイっす」

白鳥が大げさにショックを受けたポーズをとり、笑いをとることに成功している。

面倒くさいことにならなくて良かったと思っていたと、三村が訳知り顔でそつと囁いた。

「理由、言わないんだ？」

「……名前がカンペキに同じだった」

ぼそつと囁き返して、視界の端に映る少女を意識する。

外見的には目立つところのない、普通の高校生だ。

背は低いが、ロリキャラ設定には程遠い（念のため言っておくと、巨乳でもない）。

リーダーシップのある加賀森のかげに埋没まいぼつしている。性格は今見たとおり臆病おくびょうかもしれないが、それだってまどかが声をかけた時からで、その前までは他の女子と共にきやあきやあ盛り上がっていた。どこまでも普通。

「探し人？」

まどかが誰かを探していると知っている三村がまた踏みこんできたが、即座に首を振っておく。

「また玉碎たまぐれこ」

冬も涼湖りょうこと同じだった。『静義』という名を聞いても反応しなかった。

互いに名前しか手がかりがないのに、この調子だと一生見つからないような気がしてくる。だいたい、自分はいいとして向こうの名前なんて普通にありそうで困る（実際、ここにも一人いたしな）。

それ以前に、生きてない確率だって高いし。

また会おうなんて約束なんてするわけもないが、しておけば気持ちの持ちようも少しは違ったのかと思う。いまさらだが。

「田島さんの時とは反応が違うね。探し人じゃないのに気になるんだ。円城くん、それってやっぱり一目惚れなんじゃないの？」

こちらの話は、白鳥の大きなパフォーマンズで女子には聞こえていない。ほっとして、まどかは友人に冷たい視線を向けた。

「白鳥菌に感染したなら、こっちに来んなよ」

「根拠は君の視線。僕の意見と、彼の思い込みを同列に扱わないで欲しいな」

突き刺さる白眼視をものともせず、三村はメガネのブリッジを指で押し上げた。

7 ひまなので、状況説明を試みる

＊

近年、ある時を境に全国各地で奇妙な獣が跋扈^{はつこ}し始めた。

否^{いな}、仮に獣と分類されているが、ソレはそもそも生物なのかどうかさえ分からない。

少なくとも動植物という概念^{がいねん}の上にはなく、系統図など作るのは不可能なモノ達だ。暫定的^{とりあえず}に、今までいなかったモノを総称して妖獣と呼んでいるだけだ。

生命体の進化は、生存のために起こる。

大地が渴^{かわ}いたら、乾燥から身を守る粘液^{ねんえき}を出したり、あるいは乾燥に耐えられる層を持つ皮膚^{ひふ}に作り替える。

天敵がいるなら、見つからないように外見を変えるか、襲われても食われないように毒や針を身にそなえる。

それでも駄目なら生息地を変える。

できないものは死滅するだけだ。

そういう、原因と結果がある程度推測できるのが生物だ。

大雑把^{おおざっぱ}でいいなら単細胞生物から人間までの系統樹が描けるのも、その過程^{かてい}がなんとなく予想できるからだ。

だが、妖獣には一切の生物の常識は通用しない。
いっそ無生物に近い。

例えば昨日まどかが倒した甲犀こうじは、犀さいに似た姿かたちをしているが、背骨がない。そして、甲羅こうらのように固い外装といってもそれは、生物なら身を守るために発達してくるべき本来の甲羅でも皮膚でもない。

なぜなら守られるべき内臓がないのだから。

その体は、岩に似ている。表面が輝石きせきで残り全ては玄武岩げんぶがん。そういう表現をして間違いない。

そして、さまざまな形のモノがいるが、一種類一種類、その存在は断絶している。

彼らに共通しているのは、無機的事であることと、周りにある物を片っぱしから壊しまくるという行動原理である。

家があつたら家を壊す。人がいたら人を殺す。歯向う同族がいたら、どちらかが倒れるまで闘い続ける。

迷惑だが分かりやすい行動だと、まどかは思ったりもする。

どこかの詩人気どりのハンターが、妖獣は神のみた悪夢だと言っていたが、たぶん違うだろう。

妖獣に荒された町や村のありさまは悲惨で手の施しようもないが、そこには残酷性も悪意もない。

あるのはシンプルな破壊だけだ。

もし本当に神が悪夢をみるのなら、そこに描かれるのは人間だと思っ

頭脳を持ち、まがりなりにもこの大地に君臨してきた悪夢の具現である人間は、その知識と能力をフル稼働して妖獣を退治しようとしてきた。

その間に国民や居住可能な街が半減するという壊滅的被害を受けたものの、国家保全局は、ミサイルや銃、人海戦術で何とかなるタイプの妖獣はすべて絶滅させた。

現在残っているのは、それだけではどうしようもなかった頑強で凶悪で厄介なモノだけである。

まどかにとっては雑魚だったとしても、一般人にしたら抵抗不能な無慈悲な破壊者だ。

そういうモノが未だに無数にいる。

なので、ハンターには妖獣の発する精神を狂わせる咆哮に耐え、そのうえで結界や無数の詠唱で武装し、突入することが求められる。

報奨金はけっこうな額なので一獲千金を狙う者もいるが、実際は大勢でパーティを組んで一、二匹を退治フルボッコというのが常識だ。

一人頭の分け前は、防御区域内で地道に働くサラリーマンや職人を多少上回る程度くらい。現場で死ぬこともあるので、残念ながら人気の職業とは言い難い。

とはいえ、防御区域はそのハンターたちと保全局のパトロールで守られている。

市民の関心も多く寄せられている。

野蛮やばんだろうが粗野そやだろうが、簡単に目立ちたいと思ったらハンターになって実績をあげまくればいいというまどかの発想は、実は正しかった。

*

8 でも式途中で抜けたけどね

「……よって本校は文武両道の精神を養い、修身を目標に……」

長い長い校長の話が続いていた。

長すぎて、もはや誰も聞いていない。

目立たないように欠伸あくびをする生徒と、表情だけは真面目まじめに生徒を見守っているふりの教師。全員がだるさと嫌気を感じ始めたころ、突如とつじょサイレンが鳴り響いた。

緊急警報。

妖獣が防御区域内に入り込んだ印だ。

まどかは誰より早く身をひるがえすと、眠気を振り払って始業式を脱出した。

雨の校庭を走り抜ける。

「ガンバって来いよー！」というトボケタ白鳥の声援に、保全局からのアナウンスが重なる。

『北地区D区画より蟻嬢ぎじょう八匹が侵入。北地区二十五から二十八までの住民は保全局員の誘導に従って避難してください。避難区域付近の方々は、避難準備をお願いします』

まどかは小さく舌打ちした。

避難を指示された地区は、まさにここだ。

貴重品すら持たずに走る住民をよけながら逆走するのは面倒くさい。

人の波をかき分けて家に戻り、剣を持ってまた走る。

おかげで時間をロスした。

白昼堂々妖獣が侵入するなんて滅多にないが、こんな時のために学校に剣を持っていてもいいだろうか？

却下きやつかされること間違いなしの感想と共に、保全局の誘導と逆に進んで超巨大アリ（に見える何か）を探す。蟻嬢は、蟻ありだとしたら超巨大だが、実は体長は三メートル程度ていどしかない。ビルや家に隠れてしまふ大きなので、どこにいるか分からなくて困る。

「鬼灯きちよう！」

やがて同じ方向に走っていた鬼灯とミラを見つけて叫ぶと、二人はちらりと振り向いて頷いた。

「ちょうど山桜桃ゆずいが感知したとこだ。二十六区にまだ二匹残ってるそうだから、行くぞ」

補助的詠唱や『力』の感知は得意だが、運動能力低い山桃桜本人は、まだ追いついていない。それでも蟻嬢二匹なら問題はなさそうだった。

まどかは走り、鬼灯たちを追い抜いた。
逃げてゆく市民はだいぶ少なくなっている。
いるのは同業者と保全局員。

ならばもういいかと、剣を鞘さやから引き抜く。

走り方を変えた。斜めに腰を落とした構えの姿勢で、すり足で走る。

今の世では誰もやらない、古いにしえの隠密の走法。

半身を返して攻撃の当たる面を減らし、前にわずかに泳がせた左手は突然の攻守に対応できるように準備されている。剣を握った右手さえ、肘をほとんど抜かずに脇の急所を隠していた。

正々堂々が誇りである武士とも、影の戦闘集団である忍びとも違う、独特の構え。

まどかが体得たいとくしているのはそういうものだ。戦場においてそれは、魂に浸みついた本能に近い。

上から降って来る酸の液をはいくぐり、赤銅色の腹に剣を突きさす。

同時に、地面を蹴って跳ねあがる。一回転する。剣が動きに連動して、蟻嬢の体を二つに裂いた。噴火の際にできる空気を多く含んだ軽石のような体は、簡単にしとめられる。

遠目に着地すると、狂ったように暴れる蟻嬢に鬼灯がとどめを刺していた。もう一匹もミラの魔法で粉々に吹き飛ぶ。

「一丁上がりー」

「……ミラ」

語尾のはずむ口調で楽しげにポーズをとる女は、周囲の惨状さんじょうを完

全に無視していた。

元巨大アリだった破片が近所の家や道路に飛び散っているのは、デモの投石後みたいだ。血でないだけマシだが、軽石の空気穴部分に溜められていた酸が吹っ飛び、雨に薄められてさえあちこちを溶かしている。

「俺たちができるだけ被害を抑えようとしてるのに、味方のお前が拡大してどうするよお」

「だってどうせ他の壊された家とか、このアスファルトと一緒に政府が直してくれるんでしょ。ちよっとくらい大技使ってもいいじゃない」

「よくないと思います。」と

投げやりに応じた鬼灯は、ミラの腹に腕を回すと、いきなり後ろへと跳んだ。

9 実戦その1

「きゃ……何すんのよ!」

げし、と彼女の肘が鬼灯の肋骨に叩きこまれたが、刹那、その金茶の髪が数本切れて舞い上がった。

ミラがいた場所を、蟻嬢の牙が通り抜けて行った。

「なんで? あたし倒したのに!」

答えはすぐに明らかになった。二つに裂かれた巨大アリの体から細かな気泡を立てて流れ出ていた酸から、ぼこりと新たな蟻嬢が顔を出したのだ。

ぼこり、ぼこり、ぼこり……

一つ、二つ、三つ……、と赤胴色の頭が、アスファルトさえ溶かす酸の中から新たに産まれ出る。ぴしゃりと液体の音がして、一匹が前脚を地面にかけた。ずるりと体を酸の中から引き出し――

一気に飛び出した。

爆発したかのように、大量の蟻が視界を覆いつくす。

「何コレ――――っいや――――っ! あたし、わけ分かんないの大っ嫌い?」

逆上したミラの魔法がその一帯に炸裂した。
ますます吹き飛ぶ酸。そこから無限に湧き出る蟻嬢。

数十匹に増えたそれらは、無表情の眼で一斉にこちらを見た。

さすがにまどかもゾツとした。

「ほんとに、コレ何だ？　こんな聞いたことないぞ」

「蟻嬢では初めてだろうなあ。ただ、他のハンターと飲んだ時に似たような話は聞いた。倒しても倒しても増える、突然変異種みたいのがいるって」

一カ所にかたまっているのは危険なので、まどかはわざと大きな動作で塀を蹴り、他人の家のベランダに立った。

すべての蟻嬢が首を振って、視線を向けて来る。その隙に鬼灯も、ミラを抱えて平屋の家の屋根の上に飛び乗った。濡れた屋根に足を滑らせかけている。

「じゃあそのハンターはどうやってその無限増殖を切り抜けたんだ？　どっか急所でもあったのか？」

蟻嬢の一匹がベランダに前脚をかけたので、頭部を一刀両断にしてみよう。

巨大アリは庭に落ちて動かなくなったが、階下でもものすごい絶叫が聞こえた。

逃げ遅れた人間がいたらしい。確かに自宅にあんなのが転がっていたら、嫌だと思うが。

「まったく。避難勧告うけたらサッサと逃げろって」

体調が悪かろうと、介護が必要だろうと、逃げなかったら妖獣に殺されるだけだ。ハンターも保全局員も全力を尽くすが、それは個々の人助けではなく妖獣退治がメイン。自分の命は自分で守るのが、この社会の暗黙のルールだ。

「おい、中のヤツ！ こうなったら絶対出て来るなよ。その死骸が怖くても、今から避難しようなんて考えるな！」

まどかは庭に飛び降りて、自分より大きな蟻嬢の死骸をつかんだ。塀の上から襲ってくるアリもどきの頭を叩き斬りながら、庭を横切る。ひきずる死骸を突き破ってもう一匹が出てきたら、軽傷では済まない。それは分かっている、人のいる民家の庭に置きっぱなしにはできなかった。

上から蟻嬢が噛みつきにかかってくるのを、剣で払う。——こり、と手元で音がする。

彼らは目先の獲物に気を取られて、家の中に人がいるのには気づいていない。——こり。

もう少しで門だ。

さらに一匹の首を落とした。——こり……カリ……カリ。つかんでいる死骸から聞こえる音が、いつしか変わっていた。カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ……

「っ！」

まどかは背負い投げの要領で、蟻嬢ぎじょうの死骸をおもいきり門の外へ放り投げた。

同時に、だらりとした体を食い破り、大量の酸と共に新たな蟻嬢がこちらへと一直線に飛んでくる。

迎え撃つには体勢が不十分。まどかは投げた勢いのまま、前方へ転がった。

受け身から立ち上がり、覆いかぶさって来た蟻嬢に剣を突き刺し、横をすり抜ける。皮膚抵抗ひふを受けた剣は重かったが、止まらずに駆け抜ければ、脇腹わきばらを砕かれたアリもどきは地響きを立てて倒れた。

それも門の外に放り投げる。

と、聞きなれた声が詠唱を完成させた。

「これでもう増えないからっ」

道路の真ん中で、ようやく追いついた山桜桃ゆすらが小さな唇を引き結んだ硬い表情で立っていた。安全な場所など選んでいる余裕はなかったのだろっ、妖獣の攻撃を受けたら一撃でおしまいなのに、彼女は無防備な位置にいた。

まどかは反射的に門を飛び越え、彼女と蟻嬢の間にすべりこんだ。

大刀を持った鬼灯きちようが隣に並び、屋根の上からミラが広範囲な魔法を飛ばす。本気になったミラの手加減とがナシはとんでもなく派手だったが、今度は鬼灯も咎めなかった。

「っせ——っ？」

鬼灯は掛け声とともに、鬼神の働きをした。大柄な彼の体ほども

ある大刀が、縦横無尽に蟻嬢の群れを切り裂いた。一振りで複数の頭部が砕かれ、尾部が飛ぶ。もう一步進んで大刀を一閃させれば、また幾多の蟻もどきが崩れ落ちた。

「……二人とも、ここが防御区域内って忘れてるかもな」

鬼灯にわずかに出遅れたまどかは、二人の攻撃を逃れてきた数匹をさっくり片づけて一息ついた。

うしろでは、山桜桃が別な詠唱を始めていた。

防御の詠い。もちろん無力な彼女自身のためでなく、現場に立つ鬼灯とまどかのためだ。

逆にいえば、彼女はまどかが守ってくれることを信じている。

しかし、詠唱が終わる前にミラが屋根から滑り降りて来た。

「おっしまーい。あーあ、シスコン炸裂しちゃって」

「そう言うミラも魔法がでかすぎでしょ。電線が折れてるんだけど」

酸を浴びてところどころ赤くなった肌をさらした鬼灯が、巨大アリもどきの死骸を踏み越える。詠唱をやめた山桜桃が兄に駆けよって、背負っていたバッグから救急セットを出して治療を始めた。

「——北部二〇七番隊、静義だ。北地区二十六で蟻嬢を退治。数ははじめ二匹。突然変異種だったから増殖し始めて、最終的には……何匹だろう?」

「しーらない」

ゲリラ戦でも起こったかのようなとんでもない状況から、ミラは
一早く視線を逸らせた。

出来るならまどかだって、そうしたい。

折り重なる蟻嫌の数なんて数えたくもないし、それ以上に折れた
電柱と挟まれた地面、切断されたフェンスや塀など見たくない。

酸で溶け、黒ずむ家や道路は妖獣の被害だが、それよりひどい損
害を与えたのは二人の仲間だ。はつきり言って、妖獣よりワルモノ
だ。

『変異種か。厄介なのにあたったのがお前達で良かったかもな。そ
うでなきゃ、ハンターや住民にまで被害が出るところだった』

連絡を受けた保全局員は、ポジティブシンキングの持ち主ではな
くて、実情を知らないだけである。

「そう思ってくれるなら、ここの復旧は保全局持ちで頼む。オレ達
もちよつとやりすぎた気はするから、報奨金ほうしょうきんは辞退するんで。ヨロ
シク」

『え？』

何も知らない保全局にすべてを押し付けると、まどかは実戦で培
った俊敏さを総動員して通信を切った。

10 吾輩はバカである。

「やったな。こんなの直せって言われたら、この歳にして借金持ちになるところだった」

「やっぱり交渉は静義しやぎに任せるに限るわねー」

ミラは山桜桃ゆすらうめの前に両手を出した。ノリについていけない少女は、その手のひらにそつと自分のあわせた。ぎこちなく、ミラと同じ方向に首をかしげる。

「ね、ねー……？」

それでいいの、とミラは満足気につこりした。

引きこもり山桜桃の社会適合計画はさておき、いつまでもここにいて破壊現場の責任を取らされるのは嫌だ。四人は学校方向へ歩き始めた。

「それで、侵入した蟻嬢ぎじょうはぜんぶ始末できたのか？」

「どうだろ。あの現場を見に保全局員が来る前だと思うってすぐ切ったから、聞かなかった」

「たぶん平気よ。ハンターだってそれなりにいるんだから、一人じや無理でも、数人がかりでやれば問題ないし。たとえ変異種がいたって、詠唱担当が数人いれば増えないわけだし」

「ええと……でも、気流転変を止めるって気づかないと、どの詠唱で増えるの抑えられるのか分からないと思う……」

遠慮がちな主張は、もしかしたら保全局に連絡を入れた方がいい

と促されているのかもしれない。

被害が増えるのはたしかに嫌だしな、とまどかが携帯を取り出そうとした時だった。

びくりと山桜桃が震えた。

「「山桜桃？」」

兄とミラがそれぞれ声をかけたが、彼女は聞いていなかった。聞こえていなかった。

大きく目を見開き、蒼白そうはくな顔を斜め上に向けたまま固まっている。

今まで何度か彼女はそうして異常を感知することがあったが、これはいつもの比ではなかった。

小さな唇が震えていた。開きつばなしの眼はすぐに乾燥して、ぼろぼろと涙をこぼしていた。恐怖とも驚愕ともつかない表情は、不条理な死を強要された殺人事件の被害者のように深く刻まれていた。

彼女の周りにだけ異質な空気がとりまいていた。

どうしたらいいのか分からない三人の前で、山桜桃は震える指を、必死に視線の方向に向けた。

「高校、に。いる」

声にならない悲鳴を押し殺し、他の人に理解できる言葉を紡ぐ。ただそれだけの事が、彼女にとってはとてつもない努力を要した。意識を逸そらせたら、狂気に呑み込まれそうなほどの『力』。恐怖。恐怖。恐怖。

「何がいるんだ？」

まどかの問いに返事はなかった。

山桜桃は指を指しているだけで精一杯だ。

ぱん、と自分の顔を両手で叩いて気合いを入れた鬼灯きぢょうが、妹を抱え上げる。彼女は子猫が身をすりよせるように兄の胸に顔をうずめた。

ミラと鬼灯が高校に向けて走り出す。

なんだかよく分からないまま、まどかも二人を追った。こういう事態の時は、ずっと山桜桃と共にいる二人の方が慣れているし、間違わない。

*

気づかれませんように。

江上冬えがみふゆはそう祈りながら走っていた。

最初、避難は形だけのものだった。防御区域と外との境界は遠く、こんなところまで妖獣が来るとは誰も思っていなかった。

だから学生でありながらハンターの資格を持つ円城円えんじょうまじかが見事な反射神経で体育館を出て行った時も、教師の指示に従って全員で移動する時も、まだ余裕はあった。

地下道を歩きながら、大通りを越えた向こう側へと渡る生徒たち

に切迫感はどこにもない。

「円城ってホントにハンターなんだ」

「見た見た。かつこよかった！」

「えー？ 良かったけどー、でも今ごろカタナとか振り回してんだよ。あたしはナシ。絶対ナシ」

^{かがもり}加賀森や周囲の女子が緊張感なく話している時も、笑顔を作れていたと思う。

「冬は？ さつきからずーっと黙ってるけど、ナニ、本気であいつが怖かったわけ？」

「怖くはありませんけど、でも、特に仲良くしたいとも思いませんので……」

集団で移動する時の常で、普通に歩くよりも数段ゆっくりとした歩調。話をするのに適した速度は、急がせて事故が起こるよりいいからだ。

「うわ、何気^{なにげ}にさくつと切り捨てたね。円城カワイソ」

「そういつの、気にしないヒトだと思いました。そんな事より、これって帰りが遅くなりますよね。せつかく午後はヒマだと思ったのに、残念です」

「やだー、冬さんヒドイ。こんな非常事態^{ふきんしん}に不謹慎^{ふきんしん}」

「そうですか？ 湊^{みなと}さん、帰りのヒマ時間に通学路にあるお店チェックとかしようと思いませんでした？」

「……それは、思ってたけど
やっぱリーと笑いあえば、空虚と信頼が冬の胸に交錯^{くわく}した。

ヒドイのなんて、自覚している。

不謹慎なものも、知っている。
でも、それ以外にどう取り繕^{つくろ}えばいいのか分からない。
笑顔という一番分かりやすい仮面をかぶりはじめてから長くて、
ごまかさない自分なんて想像もつかない。

そうして皆で移動していたら、後列から悲鳴が聞こえた。
「なに?」「妖獣?」「うそ!」「どうしてここまで?」「知るか」
「逃げる!」
疑問が恐怖に変わるのは一瞬だった。

逃げろ、と誰かが叫んだ時には、もう生徒たちは列を崩して走り
出していた。

冬も、あつという間に人の波に呑^のみ込まれた。
何度もぶつかられ、体が後ろへと流される。

(どうしましょう)

見回しても、周りに知人は見つけれない。
加賀森も湊も、顔を覚えている同級生すらない。多数の生徒た
ちが血相を変えて互いに押し合い、押しのけながら走ってゆく。狂
乱に近い。

「知らない人ばかり。……だったら、どうせはぐれちゃったんな
ら、少しくらいなら……」

するり、と人の波に逆らって隙間^{すきま}に潜り込む。
体の小さな冬には、こうして人混みをすり抜けるのはそう難しい
ことではない。ほんの小さな隙間があれば十分だ。——足さえ

ついでにれば。

途中、何度か人の腕にひっかかって地面から足が離れて運ばれたので、素早くとはいかなかったが、冬は踏みつぶされることもなく地下道を戻り、学校にたどりついた。

悲鳴が上がったと思われる場所に。

自分がヒドイのを自覚してはいても、ヒドイ自分でいたいわけではない。できる範囲であれば、素直に動きたい。

冬はそつと玄関にすべりこんだ。

靴をはき替えに列を離れた生徒が数人、壁際に追いやられていた。かへぎわ

（こんな非常時に靴を気にするなんて、さすが人間が違いますねえ。可愛い子もいっぱいですし、時代が違ふとこんなに変わるんですね）
こんな時だが、つい、にこにこしてしまう。

下駄箱に背を押しつけている女子高生たちは、リボンの色が違うから他の学年だ。冬は学年を特定されないように自分の制服のリボンをしまった。

傘立てにさしてあった傘を引き抜き、妖獣の侵入で割れかけていたガラスを叩く。

「あいたっ」

派手に割って注意を引こうとしたのだが、ガラスは思いのほか丈夫だった。人種の変化（背が大きかったり、全体的に垢あかぬ抜けていたり）もそうだが、技術の進歩もめざましい。

冬は咳払いせきはらいをして仕切りなおした。
まあいい。ガラスは割れなかったし、反動で手が痛くなったが、
妖獣も生徒達もこちらを向いた。結果オーライである。

「どうもこんにちはー」
大袈裟おおげさに手を振ると、前脚で一人を踏み倒していた巨大アリは冬
へと正対した。

わずかに緩んだ脚に、生徒が逃げようともがいた。
しかしそれが却って妖獣の意識を惹ひいた。遠くの獲物より近くの
獲物、とばかりに牙が生徒の首筋を引き裂こうとする。

「ダメですつてば！」

冬は、反射的に手を出していた。
足元に傘が落ち、しゃら、と小さな音がした。伸ばした制服の袖
から、銅色の棒が飛び出た。

腕力などなくても、それは妖獣の体を貫く。断末魔はつまつまの咆哮ほうこうがあが
るのを、冬は耐えた。

（これくらい、平気。ぜんぜん平気）
現にびりびりと小刻みに揺れる棒は、手の震えのせいではなく、
咆哮による振動だ。

「早く逃げて下さい！ そうじゃなかったら、その人たちが助け
てあげて！」

叫べば、殺されかかっていた学生と、硬直こうちくしていた女の子たちが
我にかえる。精神を引き裂く咆哮の下、蒼白そうはくになりながらも協力し
て、アリもどきの下から脱出した。

「あなたも」

「こっちは大丈夫ですから、早く逃げて下さい！」

自分の事まで心配してくれるなんて、いい人だ。だったらなおさら早く避難して欲しい。——この場合は、あらゆる意味で危険だ。

真剣に指示したのが効いたのか、生徒たちは地下道へと走り出した。足取りはまだふらふらしていたが、獣はこの一匹だけ。追いかけてゆくモノはいないから、この場から離れてくれさえすれば安心できた。

空を見上げれば、暗く垂れこめた雲。静かに降り続いている雨。何も、変化はなかった。

（良かった。見つからなかった）

ホツと息をついて妖獣を見上げると、ソレはすでに動かなくなっていた。

突き刺していたものを袖の下にしまう。しゃりん、と涼やかに鳴った音は、倒れ伏す獣のつくる地響きに紛れて聞こえなかった。

「これで大丈夫……」

呟いて制服の胸元をつかんだら、

「江上冬？」

遠く離れた校門から、驚いた声がした。びくつと肩がはねる。

「み、見ました？ 私ナニにもしてません幻覚です気のせいです見間違いです……って、静義殿？ 戻って来るの早すぎ」
「え」

振り向けば、愕然^{がくぜん}とした様子の学生がそこにいた。
年相応の幼さを少しだけ残した整った顔と、縦に伸長しすぎて筋肉の迫いっかない体。

「いま何って言った？」

少年はものすごい形相^{ぎようしやう}で校庭を走って来る。濁^{にご}った水たまりを避けようともしないで、一直線に。大きな手がこっちにむかって伸ばされる。

いつの間に来たのか、分からなかった。
いや、それよりも。気づけなかったことよりも、つい彼の名を呼んでしまったことが失敗だった。

せつかくここまで知らないふりをしてきたのに。
彼も気づかないでいてくれたのに。
だいなしだ。

（ああもう最悪。私のばか）

11 みつけたものは、探しものとは違いました。

懐かしい呼び方をしたのは、始業式で会ったばかりの江上冬だった。

「いま、絶対おまえ静義殿^{しやぎとの}って言ったよな？」

これだけは聞き間違えない自信があった。

まどかは彼女の手を捕まえようとしたが、冬は軽快なフットワークで身をかわした（リスザルか、お前は）。

「……。なにその身軽さ。じゃなくて。お前、やっぱりあの冬だろう。なんで」

そんな行動をとられる覚えがなくて、まどかは動けなくなった。感動の再会なんて思ってたが、こんなふうには逃げられるなんて予想外だ。

固い表情は、今や全身でまどかを警戒している。

「……ウソだろ……」

記憶にある冬とはぜんぜん違う。大好きだった笑顔がどこにもない。鷹揚^{おつよう}さや優しさ、配慮はどこへ行った。

「お前、頭でも打った？」

「……ふつう、オレ何かしたくらい言いません？」

「いや、お前がボケかます確率の方が高い。肥溜^{こえため}に落ちるわ、川に流されるわ、地藏^{そな}に供えられてた饅頭^{まんじゅう}食って腹こわすわ」

「記憶にありません。お饅頭にあたって下痢^{げり}していたのは静義殿^{しやぎ}じゃないですか。どさくさに紛れてヘンなと言わないで下さい」

互^{互に}いに睨^{にら}みあう。

なんか再会、ぶちこわし。壊したのオレだけど。

まどかはボリボリと頭をかいた。
冬も、後悔したように視線を足元に落とした。

そんな仕草は変わっていなかった。

どうしようもない時、彼女はいつもそうしていた。一人で抱えんなよと言っても、そうですねと頷くだけだった。自分は一度も、彼女の役にたてた事がない。

「悪い。仕切り直そう。——さつき会ったよな。前の印象しかなかったから、お前だって気づかなかったんだけどさ、冬もそう？ だったら二人してマヌケだな」
まどかが気を取り直そうとしていたら、

「なにに、あんたがその妖獣退治してくれたの？」
「うわ、山桜桃も小さいけど、君も小さくて細いねえ」
どやどやとミラや鬼灯が追いかけてきたので、場は一気に賑やかになった。

邪魔だ。これでは込み入って立ち入った話ができない。
追い払おうと振り返ったまどかの瞳に、細かく震える山桜桃の姿が映った。

彼女は、さっきの神がかり的な空気はもうまとっていないかった。
兄に抱えられたまま怯えながら、惹き付けられるように冬だけを見つめていた。常ならざる雰囲気を感じて、鬼灯もミラも口を閉じ、少女二人を見比べる。

一目で分かる神秘性をそなえた山桜桃は、漆黒の髪と漆黒の瞳。
大人しくて滅多に自己主張をしないが、彼女はどこにいても目立

つ。人の世とは交わらない、別種の気配を持っている。

対する冬は、そういった特異性がどこにもなかった。小さい以外、特徴が無い。

ほとんどの学生と見分けのつかない茶色の髪を揺らして、困ったような笑顔をミラに向けた。この場を穩便おんびんに収めて欲しいと思っているのが、傍目はためにもうかがえる。

「えーと。まず謝ってみようかな。そのヒト、ごめんねえ、あたし山桜桃と静義の味方だから。この子たちが迷惑をかけたなら助けてあげるんだけど、今違うでしょ」

冬の笑顔が苦笑に変わった。

「私こそ、他力本願ですみません」

その方が手っ取り早いもので、と聞こえた気がした。

始業式の時の加賀森みたいに、勝手に場に応じた解釈してとりなしてくれるのを望んでいたのは明白だった。

まどかの頭にカツと血が上った。

「お前」

だが、まどかが怒りと疑念をぶつけるよりも、山桜桃が暴き晒ひたひたしだす方が重かった。

意識せずに全てを感じとる少女は、焦点の合いにくい瞳を懸命に凝こらす。

「……さっき感じたのに。もう分からない。隠したの……？ ずっとこの街にいたのに、わたし、分からなかった。さやぎ、じゃなくて、まどか君みたいには見つけられなかった。どうして……？」

いつも周囲に埋没している少女は、困ったようだった。山桜桃を見て、まどかを見て、それから一步下がった。

「見つけて欲しくないからです」

まどかは理解した。

冬は、わざと彼を避けていた。
知っていて、知らないふりをしていた。

もう一度会いたいと思っていたのは自分だけだったかと思うと、腹が立つ。名は、二人だけに通じる符丁だったのに、それすら無意味だった。

「なんでだ？ オレは」

「私は今、預かり物をしているんです。それを返すまでは目立ちたくないんです。静義殿はハンターとして有名ですから、一緒にいると、ちよつと……」

「ちよつとって何だよ！ オレは、もしかしてお前がいたら、この名前に興味を持って会いに来てくれるかと思ったのに！ だから頑張ってみたのに！」

「……」

彼女は人指し指を額にあてて、考え込んだ。ため息をついた。

なんだか修羅場しゆらばな雰囲気けいに、外野三人がいやが口を閉じて彼女の言葉を待つ。まどかも、拳を握りしめて待ってみた。

「あのですねえ、よりにもよってこのタイミングで私と静義殿が会うって、おかしくないですか？」

「あ？ 何言ってるんだ？」

話が飛んだ。

「預かり物とこの出会いが、ただの偶然じゃないって申し上げてるんです」

「……誰かが仕組んだって？ なら、誰が、なんで」
「閻緑殿えんりくどのと櫻水殿おうすいどのの二択でどうぞ」

「誰？」

両方とも知らない名前だ。怪訝けげんに眉を寄せたら、冬が申し訳なさそうに肩を縮めた。怒っていたはずなのに、まだかの方が罪悪感を覚える。

「ふ……」

「別の場所で、時間も経って、それでも出会うのは奇跡さくしか作為。私はもちろん作為だと思います。私の知る静義殿は、誰かに操られるのを厭いとう方でした。あなたもそうなら、これ以上むかしの思い出を求めるのは止めてください」

「冬！」

冬は制止に応じず、くるりと身をひるがえした。

明確な足取りで生徒たちの避難した場所へと歩いてゆく。――

まるで、そちらが自分のいるべき場所だと宣言するかのように。

「冬！」

何度まどかが叫んでも、戻ってはこなかった。

食いしばった歯が、ぎりつと音を立てた。

考えた事もない断絶だった。まどかは追う事もできずに、冷たい雨の中に立ちつくした――。

13 へこんでます。暗いです。（前書き）

解析機能つてものにようやく気がつきました。
読んでくださっている方がいると知って、小躍り^{こおどり}。ばんざい。
ありがとうございます。

13 へこんでます。暗いです。

「探してたのは、あの子だったのか？」

濡れたままだとカゼをひく、と放られたタオルを頭からかぶって、まどかは顔を隠した。本当は一人でいたい気がしたが、実は面倒見のいいミラと鬼灯きぢようはそれを許さないだろう。

言い合いをするのもめんどろで、まどかは連れてこられた鬼灯の家で雨を含んだコートを脱ぎすてた。

「たぶん。見た目も性格もぜんぜん違ってたけど、オレのこと元の呼び方で呼んだし……」

本当は自信がない。

冬はあんなふうになんかを拒絶する人間ではなかった。すつとぼけて天然だったけど、世が世ならノーベル平和賞でも受賞できんじゃないやねえってくらい、すべてに手を差し伸べる性格だった（……いや、やっぱりあいつが受賞するのはコワイ。世が世でなくて良かった）。

「アタリはアタリなんじゃないの。よく分かんなかったけど、静義とは話通じてたじゃない。単に、探し人が静義の望んでいた反応を返さなかったってだけでしょ」

「まあな……」

ミラは正しい。

拒絶と変容は信じたくなくても、たぶん江上冬が『冬』だ。探していた相手だ。

「これからどうするの？ 人探しのためにハンターになったなら、見つけちゃったんだし、パーティ抜ける？」

「ミラ」

咎める声で仲間の名を呼んだ鬼灯は、気づかう視線でまどかを見る。
る。

わだかまりを抱えている時に、早急すぎる質問だった。

しかしミラは、分かっている尋ねているのだ。そうしないと、まどかが一人で考えすぎてどんどん落ち込んで行くのが予想できたのだろう。

抱えこむ人間は一人で十分だと、猫に似た瞳が語っていた。

「……やめない」

現在進行形で考えこんでいる山桜桃ゆすらいは、まどかの答えにも笑顔を返すことはなかった。鬼灯に滴の残る黒髪を拭かれるまま、焦点の合わない表情でただ座っている。

まどかには分からないが、妖獣を倒した冬が、とにかく怖かったらしい。

「そう。じゃあ、改めてよろしくねー」

見かねたミラはまどかに言うと、山桜桃の腕を取って浴室へ連れて行った。髪の毛の長い女性は、ちょっと拭いたくらいではどうにもならない。

途端に静かになったリビングで居心地の悪さを感じた鬼灯は、コ
ーヒーを淹れ始めた。

「……俺たちの事を考えてやめないのなら、気にするなよ。生きて行く分には三人でも困らない」

「分かってるし、そういうつもりじゃない。今、他に発散できそうなのがないから」

鬼灯と山桜桃は、妖獣退治の報奨金で二人で暮らしている。

母親は山桜桃を生むとすぐに亡くなり、父親は妻を殺した山桜桃をおそれ逃げたと聞いた。

殺した、とは出産による死亡という意味ではないらしい。腹の中で母親の命を吸いつくして生まれたと、父親はそう狂乱して病院から走り去ったそうだ。

だから二人は途中までは親戚の家で育てられ、鬼灯が高校生の時にハンターになってからはこうして暮らしている。

山桜桃は産声もあげずに生まれ、成長してもさっきのように焦点の定まらない眼で空中を見ている事が多かったので、親戚にも気味悪がられ、疎まれていたという。親戚の家は、二人に取って居心地のいい場所ではなかったのだろう。

鬼灯は短く笑い声を立てた。

「妖獣退治でストレス解消なんて、お前くらいだろうなあ」

「ミラだってやってると思う」

「そうか。そうだな」

大雑把な顔にくつろぎを感じさせる表情を浮かべて、鬼灯はコーヒーを運んで来た。山桜桃が淹れる時はソーサーに乗せられるカップだが、彼はそのまま持つてくる。当然スプーンもミルクも砂糖も

ない。

あつたら使うが、なくても平気なのでまどかは素直に礼を言っ
て受け取った。

湯気が立つ。飲む。その間は部屋に沈黙が落ちる。

黙っているのも辛くなつて、まどかはタオルをかぶったままソフ
アの背もたれに頭を寄せた。少しくすんだ天井が、タオルの間から
見える。

「……鬼灯はさ、きつくてつまらない事ばかりで、その中で一つ
だけ幸せなことがあつたらどう思う？」

「その幸せを守りたいかなあ」

落ちついた声で、穏やかに即答された。

彼にとつての幸福は山桜桃だ。それからミラ。

実は重い人生を送るの鬼灯は、今は他にもいろいろと幸せを手
に入れている。大学の友人やサークルの話をする時、彼はとても楽し
そうだ。

もしそんなふうになれたなら、何かが違ったのだろうか。

まどかは思ひかけ、記憶にふたをした。ため息が漏れた。

「オレにとつて、『冬』ってそういう存在。一緒にいたのって一カ
月くらいだったけど、野良犬が優しく頭撫でってくれる人間になつく
感じ？ だから今度も、寄ってつたら撫でてくれると思ひ込んでた。
追ひ払われるなんて、思ひなかつた」

「自分を野良犬に例えるのはどうかと思うが、俺も分かるなあ。昨

日までふつうに友達だったのが、いきなり話しかけるなって」

話題が話題なので、二人で沈む。へこむ。

「たぶんあいつは山桜桃のこと聞いたんだ。それでヘンな兄妹には関わるなって周りに言われたんだと思う。へこむけどさあ、でもそういうふうには理由はあるんだよな。さっきの子にも理由はあっただろう」

「預かり物？」

「そう。あと、誰かの作為さくい。こうやって期待させるのがいいのかどうか俺には自信がないんだけど、それを何とかすれば元に戻れるんじゃないのか？」

どうなんだろう、とまどかはわざと冷静に考えてみた。

鬼灯の言葉は希望を持たせてくれるし、気持ちはそうであると信じがっている。

しかし、手放して信じるのはまだ怖かった。信じきれない。

冬は、普通ならハンター数人がかりになるはずの蟻嬢ぎじょうを一人で倒した。それだけの腕があるのに、人を守るハンターにはなっていない。

自分みづかと初めて会った時なんて、縁もゆかりもない村のために、死にそうになりながら狼を追いつづけていたのに。

時が経ったと分かっている。今と昔は違って当然なのに、下手に優しくされたから、夢を見たがってしまう。

自分は往生際が悪いのだろうか。諦めた方がいいのだろうか。

人が偽るのも変わるのも当たり前だ。言われたように、思い出なんて追わない方がいいのだろうか。

まどかが自分の思考にどつぷりと嵌まりかけていると、勢いよくドアが開いた。

「やっぱりこうなってるわけね。どうして鬼灯ったらフローリーなのー？ うつとおしい。この部屋にカビが生えたらあんた達のせい」

シャワーを浴びてきちんと髪を乾かしたミラが、ずかずかと入ってくる。

山桜桃は引つ張っていかれた時と同じく茫洋ぼうようとしていたが、温まったおかげで蒼白そうはくな肌は桃色に変わっていた。

「フローリーはしてくれた。オレが勝手に考え込んでただけで」
「高校生に庇かばわれる大学生ってどう？」

彼女は、脱ぎっぱなしにしていたコートをハンガーにかけた。かぶっていたタオルでまどかの髪を拭き、てきぱきと世話を焼く。

「どうなんでしょうねえ。とりあえずコーヒー飲むか？」

二人分のカップをテーブルに運んで来た鬼灯は、今度は忘れずに砂糖その他も用意していた。抜かりはない。

ふ、と山桜桃の視点がコーヒーに注がれた。

音もなくキッチンへ向かうと、ストックしていたクッキーを持ってくる。

14 復活は、不死鳥の羽よりクッキーで

とりあえず少女の意識は日常に戻ったらしい。

鬼灯とミラがそつと安堵あんどの息を吐いた。

「そついえば、静義しやぎつて始業式に戻らなくていいのー？」

「学校にも蟻嬢ぎじょうが出たんだぞ。あれを撤去するまで教室なんていけないって。初ホームルームは明日つて賭けてもいい」

カゴに盛られたクッキーは山桜桃やまおうしの手作りの残りで、まどかは左手につかめるだけつかんで、ぼりぼりと食べ始めた。

糖分が低下している時にものを考えると、思考まで下降する。落ち込まないための予防だ。

「というのはタテマエで、単純に山桜桃のクッキーが美味しいからでしょ。もう、一人で食べないでよ」

ミラが細い指で、左手にキープしていた菓子の半分をさらっていった。

「横暴」

「どつちが。四人いたら四等分なの。レディファーストって言わないだけマシでしょ」

「ぜつたい却下。ミラに優先権を与えたら、オレまで回らないに決まってる」

「あんたじゃないんだから、そんな事するわけないじゃない」

「いいや、する。鬼灯に食わせないために、絶対する」

「あ。鬼灯きとうが入ったら、そうかも」

たまに子供になる二人のミニクイ争いを横目に、鬼灯が話を戻した。

「……静義が騒いだから忘れかけてたけど、高校を襲った蟻嬢ってあの子が退治したんだよな。山桜桃はアレに何を感じてたんだ？」

「あの人も『力』のある人。お兄ちゃんや静義みたいに生命力なのか、わたしみたいなのは分からなかったけど、トータルで強い人……凄すぎて怖かったけど、静義だったら頑張ったら並べるのかな……」

少女は小さくクツキーをかじって、まどかの視線を避けた。

「はいストップ。山桜桃はそこで落ち込まない。存在力が静義とみあうかどうかなんて関係ないんだから」

「……ここはコメントしないほうが安全だ。下手をするとミラにぶちつと潰される。」

まどかはクツキーに専念する。

「てか強いのはいいけど、あの子どうやって化け物アリをやっつけたのかしら。見た目華奢（きやせう）だったから、あたしと同じ魔法使い？ それとも山桜桃みたいな……のはナシか。詠唱で妖獣は倒せないもんね」

「そつえば見なかったな」

まどか達が駆けつけた時には、蟻嬢は地面に倒れていた。その後も死骸なんて気にもとめていなかったが、致命傷（とくめつしょう）が分ければ採った手法が分かる。ほんの少しでも、冬の事が分かる。

携帯を取り出したまどかは、保全局の短縮ダイヤルを押した。

三人が注目する中、高校まで突撃したアリもどきの傷を尋ねる。

『南東北高校？ ああ、目撃証言はあったんで局員が出向いたんだがな、なんにもいなかったぞ。きっと別の場所に移動したんだろうな』

「は？」

そんなわけではない。死骸はきちんと（というのもおかしい表現だが）玄関に倒れていた。話が聞こえている三人も、不審を隠せずにいる。

『けど、そうすると数が合わないんだよな。侵入したのが八匹で、退治の報告があったのが七匹。お前達、無限増殖タイプだったんだろ？ 実は数え間違いで、元は三匹だったりしないか？』

「しない」

それは確実だ。まどかは局員が現場の惨状を思い出す前に、またもや即行で通話を終わらせた。

リビングに沈黙が落ちた。

全員で、顔を見合わせる。

「いったい、どういうことだ？」

当然、誰も答えは知らなかった。

15 インターローグ（前書き）

かなり、ホラー気味です。

たぶん読まなくても話はつながるので、苦手な人は自主避難してください。

15 インターローグ

*

白い小さな獣が、ビルの窓辺から中をのぞいていた。

女性向けの服や雑貨を扱うテナントが複数入っているビルの三階。その上部にある換気用の細窓の枠に前肢をちょこんとかけた姿勢で、長い時間、そよとも髭を動かさず、白目の無いぬめる瞳で中をのぞいていた。

「聞ってる？ 三人目だよ、三人目！ もうヤダ！」

服のかかったハンガーを次々に右へと移動させながら、少女は携帯電話に向かって怒鳴っていた。もともと彼女のメイクは濃かったので、二十代後半にも見えた。少女と表現するには、多少ひっかかりを覚える外見だ。

「あんたが調子に乗るから。……知らないよ、そんなの。あたしじゃないって！」

その一列にかかっていた服を全て見るだけ見て、乱暴な足取りで隣の店に移動しようとした彼女は、電話の相手がキレた声で怒鳴り返すのを聞いた。

——それから、鋭い、暗い音を。

悲鳴に近いが、人の声ではない。重い、重い音。肉の塊が潰れる音もした。全く関係のない音に、背筋が冷えた。ゾツとする。

「何？ 心愛、あんた何してんの」

『何って。そっちこそ、いきなり何よ』うがあああああっ』

「心愛っ？」

『だから何なの？』 ああああああっ』

いつも一緒に遊んでいる相手の声が、どこか遠い。その後ろで、彼女の声に重なって上がる絶叫の方がリアルだ。

激痛をこらえる絶叫に気づいてしまえば、もうその悲鳴を拾う事に集中するしかなかった。息をひそめて、携帯を耳に押し当てる。

ごっつ、と音がした。

途切れない断末魔^{だんまつま}の悲鳴に混ざった、くもぐった音は知っている。厚めの肉の下で骨が折れる時の音。いつかどこかのデブを思い切り蹴った時に同じ音を聞いた。

続く、づぢや、という鈍い音は知らない。知らないが、固い物が柔らかい物を突き破っている濁音^{だくおん}は、想像がづくだけに嫌なかんじだ。

『ちよつと聞いてんの？ ねえ！』——ちや、ぴちや——』
友人の声がうるさかった。ただ、かすかに聞こえる液体の音はわかる。痛みにもだえる誰かに、ふざけて灯油をかけてやった時と一緒。

「心愛、心愛、あんた今何してんの、ホントに大丈夫？」

『はあ？ 大丈夫って、ソレあたしのセリフ。あんたおかしくなつてんじゃない？』 轟音^{こうおん}。

耳元での爆音にびくつとして、彼女は携帯を床に取り落とした。ワンバウンドして、くるくる回る長方形をみつめる。

分かった。

友人の声にかぶって聞こえる音は、いじめでも悪ふざけでもない。交通事故だ。

最初のは車がガードレールを突き破る音。絶叫は、轢かれた人間の声。骨が折れて、それが肉を突き破った。そしてガソリンが流れて爆発。そういう、一連の音。

でも、どうして、そんなのが聞こえるの？

恐れを宿した目で携帯を睨みつけた彼女は、怖がる自分に腹を立ててもいた。平気なふりで、壊れてしまった携帯を拾う。

画面が黒い。ひびまで入っていた。

構わない。こんな気持ち悪い物、買いかえてやる。彼女がそう思った時だった。

壊れたはずの携帯から、突然さっきの絶叫がもう一度響いた。

「きゃあつ」

周りにも聞こえるような大声をあげてしまった。ショップ店員や客が一斉にこつちを向いた。

その、目。責めるような、目。

「……なによ」

田島涼湖が自殺した件に自分が関わっていたと知った時の、滅多に帰ってこない両親から向けられた目。弟の目。近所の、知り合いの、同級生の、全然知らない他人からの、蔑むような目。

「何みてんのよー！」

イジメなんて、それくらい誰だってやってるのに、自分だけじゃ

ないのに、自分だけが悪いと決め付ける人間達の目。

「あたしじゃない、涼湖が悪い！ 大人しくしてればいいのに、巫女だなんてバカ言つて、謝らないから謝らせようとしただけなのに！ あんなに人が来るとは思わなかった、死ぬなんて思わなかった？」

注目してくる視線に抗い、少女は怒鳴りながら周囲を睨みつけた。いつもなら睨んだだけで目を逸らすはずの人々は、いつまでもどこまでも彼女を見つめて来た。

「なんで」

目、目、目。責める目が消えない理由は分からなかった。だが、壊れた携帯から響き続ける絶叫の声が誰なのかは思いついた。

彼氏だ。この間事故にあつて、見舞いに行ったばかりの彼。

携帯が着信音を奏でた。

携帯を持つ手が震えた。

壊れたはずなのに、いつの間にか、メール表示の画面になっていた。

ツギハアナタ

「つやあああああああああ——っ？」

少女は携帯電話を床に叩きつけた。

二つに折れた。破片が飛び散る。

なのに、彼氏の絶叫だけは携帯から聞こえ続ける。やまない。やまない！

彼女は身をひるがえすと、フロアを駆け抜けた。

逃げたかった。ただ逃げたかった。

人を突き飛ばしてエスカレーターを駆け下り、——転んだ。

ヒールのかかところが溝にはまっていた。ありえない。

体中をエスカレーターの角にぶつけながら転がり落ちる彼女の脳^の裏^{うり}に、呪い、という単語が浮かんだ。

エスカレーターのステップに頭を打ち付けて脳挫傷^{のうざしょう}を起こした彼女は、そうして息を引き取った。

白いものはじつとそれを見ていた。

表情は変わらなかったが、どこか満足そうな気配が漂^{ただよ}っていた。

ソレはやがて卓球の球ほどもない小さな頭を上へと向けたかと思うと、垂直な壁をゆっくりと降りた。

*

16 まどかの日常・その1

翌日――

「へえ、増える妖獣なんているんだ。僕、知らなかったな」

「そういう怖いのはパスだけど、一回見に行ってみたい。まどか、外の見学ツアーを企画しよう!」

「帰宅させなくてもいいなら、いくらでも連れてってやる」

「怖えっ! 置き去りにすんなよ!」

昨日同様、三人で登校すると、好奇の視線が集まった。

「やあ! おはよう諸君。本日もこの白鳥にご注目くださって感謝ですよ。特に女子からの熱い視線とメールは大歓迎」

きょうたん

教壇にのぼった白鳥は大げさに手を広げ片足をひき、どこの国・何時代だという一礼を披露ひろうした。九割の苦笑と一割の拍手を受けて顔を上げた彼の前を、悠然ゆうぜんと三村が通りすぎてゆく。

「キミにメアドを教えてくれる奇特きとくな女子がいるとは思えない」

「いるって!」

「ああそういえば、僕に渡して下さいってメモをくれた子はいたね。それカウントしちゃダメだよ」

「誰がするか! つか三村それは自慢なのか? 自慢なんだな! くらえ嫉妬ビームっ?」

素すでプチコントを繰り広げる二人へと注目が集まる。

まどかは感謝して、自分の机を探した。――噂は、もう広がらなくていい。

机の端についている、名前の書かれた付箋ふせんを見ながら歩いていると、江上冬が席を立った。入学当初、席は男女別に五十音順にきめられているので、数人分うしろの加賀森かがもりのところへ話をしに行っらしい。

「……」

それとも避けられたのだろうか。

冬の隣りの机につけられた自分の名前を見つけて、まどかは洪面こうめんを作った。

疑惑は、最初のHRで確実になった。

「——一年は長いようであつという間です。みなさんも遊び過ぎて後悔のないよう、気を引き締め直していきましょう。では最後に、何かありますか」

担任の挨拶あいさつとカリキュラムの説明があつた後の事だった。

冬が体を斜めにして手を上げた。

「すみません、先生。私ちいさくて、黒板が見えないんです。一番前にしてもらってもいいでしょうか」

「ああ、そうだね。相沢さん、替わってもらっても大丈夫ですか」

ちよこちよこと小走りになって、すみませんと相沢に謝る冬は、確かに小さい。

身長順に並んだら、文句なく一番前だろう。小さくて、体を斜めにしなければ前の生徒に阻まれて黒板が見えないのも事実だ。

だが、とまどかは思った。

「あいつ、本気で避けてやがる」
自分の隣りにいたくないというのが本音だろう。

「円城くん、僕は思うんだけど、一人の女子を一日中目で追うのは、それが恋だとしても失礼だ」

放課後、三村が訳知り顔で言った。

「一途さとストーカーは、非常に近い」

「そういう時は俺たちに任せろって。ほのかさん達を巻き込んで盛り上げてやる！」

まどかは中味を全部机の中に入れたままの軽いカバンを、騒ぐ白鳥の頭にぶつけてやった。

「実行したら殺す」

そのままカバンを持って教室を出る。後ろで白鳥が頭を押さえてうなっていたが、日常の範囲である。

恋でないのは当然としても、無視されると気分は良くない。

ムカつくしイラつく。

クラスで楽しげに話していた冬は、今日一日、一度もまどかを見なかった。記憶の中の彼女とは違う笑顔を惜しげもなくばらまくせに、ちらりと視線を向けることさえなかった。

いっそ別人だと割り切ったほうが楽だと、何度も思った。のに――

差し伸べられた優しい手。唯一、人間扱いをして笑いかけてくれた。その記憶を捨てるのはもったいない気がした。

もったいないと思う、その貧乏根性が悪かった。
おかげで本日中には割り切れなかった。

きつと明日には思考の切り替えもできるだろう。

もういい。もう今日は考えるのはやめよう。まどかがため息をついて下校の鐘が放送される校庭を歩いていると、校門の方でざわめきが起こっていた。

「？」

女子も男子も、小声でささやき合っている。みんな好意と好奇心を前面に出しているの、事件ではない。

緊急事態でないならどうでもいいと、まどかがテンションが低いまま校門を過ぎると、背後から声をかけられた。

「さ、じゃなくて、まどか君」

驚いて振り返ると、山桜桃^{やざくら}が泣きそうな顔で立っていた。

17 まどかの日常・その2

「なんでココにいんだよ」

山桜桃^{ゆすら}はかなりの引っこみじあんで、親戚^{しんせき}の家にいたころは一度も学校に出てきたこともない不登校、現在は通信教育という筋金入りだ。

まどかは出会ってから二年たつが、そのあいだ彼女が一人で外出したのを見たことがない。

他人とは異なる雰囲気をもつ上に、人目を引く顔立ちをしている。どうしても目立ってしまうのは、本人にとっては針のむしろだろう。

「鬼灯とミラは？」

ふるふると、首を横に振られた。美少女以外に許されない仕草^{しぐさ}である。

「こんな所で待たなくていい。用事があるなら、携帯に電話くれればいいのに」

まどかが人目のないことへ行こうと促^{うなが}すと、少女はまた横に首を振った。

困ったような表情はあまり自分に向けられたことのないものだったので、思わずまばたきを繰り返す。

「もしかして、オレじゃない？」

こくりと小さく頷^{うなず}かれて、校舎を振り返る。

生徒数の多い学校だから、ここに数少ない山桜桃の知り合いがい

てもおかしくはないのだが。

「……冬さん」

震えるか細い声が、一生懸命つむがれた。

「だったらもう帰ったぞ。他の女子と一緒に、雑貨屋めぐりするって。割り切ろうとした矢先に、どうして思い出させるかな」

とたんに不機嫌になって、まどかは告げた。

「うそ……。だってわたし、ずっとここで待ってたのに」

「もしかして、知ってて避けたのかもな。オレも避けられっぱなしだったし」

いずれにしろ、待ち人が残っていないのはしょうがない。

まどかは山桜桃と連れだって帰り道を歩き出した。ずっと人目にさらされて耐えてきた少女は、精神的疲労と空振りの脱力感で足元がふらついている。

「それでよく来る気になれたな」

「お兄ちゃんとミラが一緒だと、あのひと、本当を教えてください」と思ったの

「本当って？」

感性だけで生きている山桜桃には、人の言葉に違和感を感じるらしい。言葉と感覚の差を埋める一番近い単語を探して考え込んだ少女を根気強く待って、まどかは街を歩いた。

学生の多い時間帯なので、同じ高校の制服をあちこちで見かける。たまに山桜桃に見とれる男子もいたが、彼らは隣にいるまどかに気がつく^{あわ}と慌てて視線を逸^そらせた。始業式を飛び出したハンターの

噂は、すでに全校に伝わっている。

「あのひと、隠してるの。それを見せて欲しかったの」

ようやく少女が探し当てた単語は、的確ではなかった。少なくとも露出狂方向ではないはずだ。

分かん。と、まどかは眉を寄せる。

「前にも言ってたな。隠してるから、今まで見つけれなかったって」

「うん。静義……まどか君が探していた人っていうだけじゃなくて、お話したいの。もしかしたら、あのひと、わたしと同じかもしれないから」

「もう使い分ける意味ないから、呼び方は静義でいい。それで？」

同じって、冬が詠唱したのなんて聞いたことないけど」

「ちがうの。そうじゃなくて——巫女」

あまりにも真剣な声だった。

ふいに、かつて聞いた狂える女子の言葉が蘇った。

『それは人ならざる者の声を聞く者』

『神の声を聞き、人に伝える者』

『巫女は、他の人とは同じになれない』

『さあ、神意を聞きなさい』

涼湖は——

寂しさと傲慢さをまとった少女だった。——自分もそう

だったかもしれない。

そうして、彼女はひとり死んだ。——放っておか

ずにいたら、死なないで済んだのか？

呪詛^{じゆそ}を残して。首を吊って。――もしかしたら、
助けることができたのだろうか。

「……巫女なんて口にするなよ」

「他になんて言ったらいいの？」

山桜桃^{ゆすら}には涼湖の悲劇を繰り返して欲しくなくてきつい言い方になっちゃったが、少女は理解していなかった。

学校という多くの他人と過ごす場所を避けてきた彼女は、そもそも他人から浮くことが日常なのだ。

「そういうのは、言わなくていい事なんだ」

まどかは切なさを漏^もらした。

こんな素直な山桜桃にさえ、自分には言えないことがある。

冬にしか分かってもらえないこと。

いまだに自分は排斥^{はいせき}を恐れている。

冬に拒否された今はなおさらだ。大多数はどうでもいいが、一度受け入れてくれた鬼灯^{きちよう}たち、白鳥たちを失いたくない。

――いっそ、拒否を恐れない山桜桃の方が強い。

「じゃあ、そういうモノ。あのときの空気は魔法とも違う気がしたから、ミラの仲間じゃないと思う。似た人がいない人。だから、もしかしたら、揺らぎと濃淡が分かる人なのかなあって」

「……たぶん、分かる」

ハッと、山桜桃が足を止めて顔を上げた。絶^{すが}る色があった。

「だったら」

「山桜桃は自分の気持ちをわかって欲しかったんだな。同じモノを

見て同じ話をしたかったんだ。でも、ダメだ。冬は話なんてする前に拒否する」

昔の彼女なら、いくらでも山桜桃の話を聞いただろう。同じ目線に立っただろう。

しかし、冬はまどかが探していた『冬』ではない。
変わってしまった。

彼女は空っぽの笑顔で、困ったように笑っただけだ。
伸ばされた手など取らない。

「……『冬』が山桜桃だったらよかったのに。そしたら、こんな変な状況になってなかったよな。お前を守ってやったら、オレも普通に幸せなカンジだし、あの時の借りも返せて一石二鳥で」

瞳を伏せたまどかと対照的に、キツと山桜桃がまなじりを上げた。
大人しすぎる彼女の、初めての表情だった。

初めてがいつぱいだ、とまどかがズレた事を考えているうちに、
彼女は大粒の涙をこぼして睨みつけた。

「ゆす……」

「わたしの気持ち、ちよつとは分かってるって思ったのに。それって絶対違うと思う！ もういいっ！ 静義しやぎのばか？」

ばか？

まどかは走り去る山桜桃を捕まえようとしかけた体勢で、目を点にした。

今、会話がかみ合ってなかった。

自分が手ひどく拒絶されたから、山桜桃には傷ついて欲しくなくて、ついでに答えの出ない事を考えすぎて疲れてすっかり逃避ぎみ

なセリフになった。

山桜桃はそれを、恋愛コードで翻訳ほんやくしていた気がする。
違うのに。他意なんてなく、単純にへこんでいただけなのに。

まどかが伸ばした手をのろのと戻して我に返れば、見ていた学生たちが一斉に顔をそむけた。……どう思われたかは、考えたくない。

「サイテー」

吐き捨てる声の元を探せば、雑貨屋の前で加賀森かがもりが軽蔑けいべつの表情を浮かべていた。もちろんその一団には冬も混ざっている。

「うそだろ……」
いつの間にか四面楚歌まわりじゅうてきだった。

まどかは、完膚かんぷなきまでに撃沈された。

18 吾輩はバカである。その2

＊

硬直していたまどかは、なんだか可哀想だった。

公衆の面前で「ばか」と泣かれて、女の敵と加賀森かがもりに罵ののられて。

原因が自分にありそうなので、同情の度合いはさらに強まったが、だからといって何ができるわけでもない。冬は誰にも悟られないように、そつと溜め息をついた。

——水晶の少女はきれいだった。

昨日見た時もきれいだと思ったが、自分の足で立つ姿はもつと際立っていた。漆黒に縁取られた、透明な少女。まるで占いの球だ。あれでは自分の中にすべてを映し過ぎて、痛みも多いだろう。

冬は誰にも見つかりたくないからあの少女の中に自分を映すことはないが、その分だけ彼女の痛みが減るのなら、預かり物さえ悪くない気がした。

「冬といい、今の子といい、円城えんじょうの好みって大人しいタイプなのね」

違うと思う。

が、コメントできる立場にないので、困った感じの笑顔をはりつけて首を傾げておく。

「でもひっかかる前に分かって良かったよね。こうなると、二組の男子トップは三村かな」

「微妙ですね。あのしゃべり方を何とかしてくれたらアリなんですけど」

「あはは。『円城くん、女性を泣かせるのはクズだと知ってるかな？』」

「似てる！」

皆で好き勝手言いながら駅へと向かう。

徒歩通学の冬は途中で手を振って別れ、そして角を曲がった瞬間に笑みを消した。

—— 疲れた。笑顔が疲れた。

友人たちとの無意味な会話は嫌いではないが、裏事情に勘づきながら笑いのネタにするのはあまりにもきつかった。

心の中でまどかに謝ってから、自分の顔に触れる。ちゃんと笑えていただろうか。笑顔の仮面は、剥がれていなかっただろうか。

むにむにと頬をつまんで筋肉をほぐしていると、どこからかすり泣きが聞こえてきた。

「……」

時間と距離から考えて、十中八九さっきの水晶の少女だと思う。

冬がそつと物陰から首だけ出してみると、商業ビルと民家の隙間に残された小さな神社のすみで少女が泣いていた。

保護者、さつさと迎えに来なさい。

そう思うが、まどかも昨日一緒にいた二人も、誰も来ない。十分待っても二十分待っても来ない。

やがて、保護者も変質者も来ないうちに、少女は泣きやんだ。

泣きはらした赤い目で、鼻をくすんと鳴らしながら神社を出てゆく。

冬がほつとして彼女の後ろ姿を見送っていると、境内で何かが揺らめいた。振り返れば、桜の結界がざわめいていた。

黒い靄^{もや}が見えた。

恨みと悪意に満ちていて、それでいて誇らしげなモノ。

慌てて首を戻してもう一度少女を見直してみたが、幸い妙なモノは憑^ついていなかった。
「良かった」

彼女のためにも、自分のためにも。

除霊した方がいいと思うが、実行するのは少しためらう。

昨日は妖獣に手を出して失敗したのだから、やたらに力を使わせないで欲しい。駄目だと分かっているにも、実害のあるモノにはどうしても手を出したくなる。それは困る。

あの靄の感じだと理に適^{かな}っているようだし、それなら我慢しよう。我慢我慢。冬はそう自分に言い聞かせた。無意識に、制服の胸元を

ぎゅっと握りしめる。

自分は隠れていてはならない。今はまだ。そうでなければ、やぎ長年静義の名を無視してきた苦勞が報われない。

——その名を聞いたのは、新聞でもニュースでもなかった。同級生の男子が興奮して話題にしていた時だ。

父親が妖獣退治を職業にしている同級生が、自分たちと同年のハンターが出たと騒いでいた。誰にも師事しじせず、独特の剣術を使う新人が突然登場した、と。

名前と武器の扱い方からすぐに彼だと分かった。が、同時に、畏だと疑った。

わざわざ自分の知り合いを目につかせる理由が、他に思いつかなかった。その後で考え直して、こうい厚意なのかとも思ったが、はつきりしないうちに接触するのが危険なのに変わりはない。

会って話したいとは思ったが、結局は危険性を鑑かんみて、記事を読むだけにした。

関係を悟られないために、興味のないフリもした。

元氣だと分かれば、それで満足だった。なのに。

なのに、こんな所で破綻はたんするなんて思わなかった。無試験で国家保全局にキャリア待遇入局という噂は嘘だったのかと聞いてみたい。

「私も、閻緑殿ろりよくどののばかと言ってもいいでしょうか？」

彼女の後ろ姿を見送って、冬が帰ろうとした時だった。
水晶の少女が、何気なく振り向いた。なにげ視線が合った。

「……ばかは、私ですか」

ぱあっと顔を輝かせて走り戻って来る少女からは逃げられないと知って、冬は神社から離れて待った。

*

19 お兄ちゃんは心配性（前書き）

この漢字だらけ・ルビだらけの黒画面にポイント下さった方、お気に入り登録をしてくださった方、ありがとうございます。平身低頭。感謝感激です。

19 お兄ちゃんは心配性

携帯には心配しないでとメールが届いたが、夜になっても帰ってこない山桜桃^{ゆすらう}を心配した鬼灯^{きぢよう}はリビングをうろろ歩き回っていた。

泣かせて逃げられたまどかは、右足だけ貧乏ゆすりをしながらソファに座って仏頂面^{ぶつちやうめん}をしている。

どうしようもない男たちに、ミラはラーメンを突き付けた。

「まだ七時だから。世の中の中学生がその辺うろついててもおかしくない時間って思い出したら、とにかく食べなさい」

「でも山桜桃は」

「食・べ・な・さ・い」

過保護な兄を一言で黙らせて、ミラは二人がインスタントラーメンをすすめる向かいで電話をかけた。

メールを打っても返信が来ないので、彼女も心配はしているのだ。何回目かのコールで山桜桃が出た時には、安心のあまり、逆上して怒鳴りそうだった。

『ミラ？ 連絡が遅くなってごめんなさい』

「そうね、今度からはメールだけじゃなくてちゃんと電話もちょうだい。誘拐されたかもって悩むお兄サマが神経性胃炎になっちゃうから」

ラーメンを黙々とすすっていた二人が、勢いよく顔を上げた。箸^{はし}を持つ手が止まっていたが、ミラが睨^めみつけると、一気に麵^{めん}をかきこんで丼^{どんぶり}を流しに運んで洗ってから飛ぶように戻って来た。

これだけの動作が一連でできるなら、食器洗いまですればいいの
にと思うミラである。

そんな日常性とはかけ離れた心境だったまどかは、彼女の携帯を
奪うと叫んだ。

「オレが悪かった!」

『……そうかも。今わたし、冬さんと一緒なの。一生懸命話したら
分かってもらえた。だから、静義しやぎが間違い』
理解するまでに数秒かった。

その間に携帯は鬼灯に取られて、喜びのセリフが凄く大声で響き
渡っていたが、まどかの耳と脳はその声を完全にスルーした。

——冬が、なに？

「どういうことだ？」

鬼灯の腕に跳びついて携帯に叫べば、弾んだ声がかえってきた。

『巫女みこじゃなかった。それ以上は内緒みこって約束したから、秘密』

「なんだソレ!」

絶叫は鬼灯に振り払われて途切れた。シスコン兄が携帯に頼たのずり
しそうな勢いで話しているのを、床に座り込んだまま茫然ぼうぜんと眺ながめる。
ミラがアワレな雑巾ぞうきんでも見るような視線をこちらに向けていたが、
まどかは気づけなかった。

冬と、話した？

秘密？

どうして。どうして自分じゃなくて山桜桃に？

「あんな幸せそうな声、初めて聞いたあ。よかったあ。山桜桃は友達を作れないからずっと気にしてたんだが、こうして少しずつ話せる人を増やしていけば、いつかは大丈夫だよな！」

感極かんきわまった声が、まどかの頭上を通りすぎていく。

「まあねー。いきなり明るくてびっくりしたけど、いい傾向なんじゃない。どうしても話をしたくて一人で出かけるなんて、ものすごい進歩。冬って子がどういう子か知らないけど、人間凶器な静義と究極に臆病おくひょうな山桜桃を惹ひきつけるだけでも拍手モノだし」

呆あきれを含んだ、面白がる声も遠い。

「……オレも行ってきた！」

何もかもが理解できなかった。

冬に会って話さなければと、気持ちだけが空回からる。盲目的もつもくてきに立ち上がったところをミラに足を引っ掛けられ、まどかはまた転んだ。

「あたしが静義に勝てるってあり得ないのに、ほんとと周りが見えてない。こんなで乗りこまれたら、たまったもんじゃないってね、鬼灯。タクシーで帰って来るって言うてるのに、踏みこんじゃダメよねー？」

床に転んだまどかの上に、ミラが馬乗りになる。下から見上げる柔らかな体はある意味男のロマンだが、今はそういう場合ではない。

押さえつけられる前に脱出しようと必死に足掻いたまどかは、

「駄目だな。また山桜桃を泣かせたら、延々正座させてやる」

大真面目なシスコン兄に素巻きにされた。

20 インターログ2（前書き）

またまたホラーです。

前のよりもいやんな感じでした。本人も書いてて嫌でした。

苦手な方は回れ右でお願いします。読まなくても話はつながります。

20 インターローグ2

＊

窓辺から覗く^{のぞ}白いモノは、今日はそこにいた。

くすんだ壁に貼^はられたメモやポスター、扉が半開きになっているクローゼット。皺^{しわ}だらけのベッドシートの上には、乱暴に跳ね^は上げられた毛布と布団が重なり合っていた。

それだけを見たのなら、ありきたりな部屋だと判断しただろう。

だがその部屋の住人は、クローゼットから取り出した制服を思い切り床に叩きつけた。踏みつける。何度も何度も。

数少ない家具が揺れ、少しだけ埃^{ほこり}が舞う。

階下に家族がいれば驚いて駆けつけたはずだが、今は誰もいない。

だから少年は、荒れ狂う心のままに制服を踏みつけた。

次いでハサミを取り出し、渾身^{こんしん}の力を込めて突き刺した。鈍い音がして、制服を貫^ついた刃先がフローリングの床に深く埋^うもれた。

引き抜くのに苦労した。呼吸が乱れる。

もう一度、頭上高く掲^かげて振り下ろす。ハサミが正確に校章に突き刺さった。

引き抜く。振り下ろす。

彼はその作業を繰り返した。息があがり、額にも両手にも冷たい汗が噴き出す。制服は紺色の端切れに成りはて、床は抉られて木片をばら撒いていた。

「くそつ、くそつ、くそつ！」

それでも少年はハサミを振りおろし続けた。口元に泡を吐き、無意味な言葉を繰り返す。

その彼の横にある、いまだに丁寧に整頓されている本棚には、教科書や参考書の他に軽めの小説がたくさん並んでいた。知っている者が見れば、その全ての小説に共通点があると気がつくだろう。

いつも虐げられている主人公が何らかの契機で立ち上がり、成功し活躍するストーリー。

少年は唯一秩序を保っていた本棚に手をかけると、小説を床に放り投げ始めた。小説が無くなると、教科書と参考書も投げ捨てた。あつという間に足の踏み場がなくなる。

棚が空になった。

「ふうふうふうふう」

ポスターを破り捨てた。メモも捨てた。机の中にあつた全てをかき出して捨てた。机を倒し、空になった本棚を投げた。棚は壁に当たって、歪んだ形で曲がって止まった。

途中で床の残骸を踏んで、人の中指ほどもある木片が足の裏から甲へと突き破った。しかし痛覚は激情に圧倒されて麻痺していた。血が本や床を赤く染めたが、彼は作業をやめなかった。

少年は手当てなど思いもよらず、狂ったように破壊と投棄を続けた。

シャツは汗で貼りつき、青い顔には黒い隈くまがあつた。
落ちくぼみ、まばたきすら忘れて乾燥した眼球が、憑つかれたよう
に部屋を見回した。

投げる物が無くなった。壊す物が無くなった。

「うつうつうつうつ」

少年は唸うなった。否定すべき自分の持ち物が無くなれば、あとは――

自分だ。

白い影が窓辺で揺らぐ。無言で責めるように、延々（えんえん）
と揺らいでいる。

見たくない見たくない見たくない？

思考とすら言えない原始的な感情で、彼はごみの海を泳いだ。窓
の近くにあるドアではなく、部屋の奥へ。どこか奥へ。

一歩ごとに、足に刺さった木片が深く食い込む。輪郭りんかくの曖昧あいまいな血
の足跡がそこかしこについた。

痛みを感じない代わりに、歩きにくいと苛いらだ立った。

少年は必死で逃げた。隠れ場所を探した。

白い影の見えない場所へ。呪いに見つからない場所へ。

半開きのクローゼットがあつた。中は空。その中へ入り込んで、
耳をふさぐ。きつく目を閉じる。

それでも――そこにいるのが分かる。

きつと責めている。呪いの意識が、隠れたはずの自分を見つけた

のがはっきりと分かる。

ぞつとした。耳をふさいだ手が、ぶるぶると常識を逸いっした動きをする。震えというより、痙攣けいれんだ。

あの時も、彼だけは怖がっていた。今もそうだ。怖い。臆病おくびょうだと自覚している。

「そうだよつ。怖いよ怖かったよ！ 震えて悪いかよしょうがないんだお前もあいつらも消える消える消える？」

彼は目を閉じ続けた。

彼をいじめる同級生たちは、いつも一緒に来いと強要した。小遣いを巻き上げられ、使い走りをさせられ、他の誰かに軽い暴力をふるう時は参加させられた。

本当は、彼の小遣いが無くなれば他の誰かが払っていたし、飲食だって共にしていたのだから、同級生たちには彼をいじめているという意識はなかった。格下の仲間という分類に近かった。

しかし本人には、客観的に分析する余裕はどこにもなかった。彼らと一緒にいるのが辛かった。常に耐えていた。嫌だとは言えなかったから、我慢し続けていた。

逆らえば、今まで自分が暴力行為に参加させられた時の被害者のように、容赦やじやうなく殴られ蹴られると思ったから。怖かったから。

本当は、床に散らばる小説の主人公みたいに、最後には彼らと決別したかった。やりたくない事を強要されたら、断れるようになりたかった。

いつかは、と思っていた。

だがやはり『いつか』はこなかった。

それより先に、凍えた空気が部屋に満ちた。

恐怖が、満ちた。

そこに、いる。

彼が隠れているクローゼットの真ん前に。

耳をふさいで震え、目をきつくつぶり続けているのに、それだけ
ははつきりと感じられた。

熱いのか寒いのか分からない感覚。頭の方から足の裏までぬめる
汗が噴き出す。足元で、汗と血が混じった。

ようやく木片に気付いて、彼はそれを抜いた。痛みが全身を貫いた。
咳き込むほどに濃い血臭。息が上手くできない。吸えない。干
上がった魚が喘ぐのに似て、口だけが何度も開閉する。

悲鳴のような呼吸が漏れ、彼はさらに恐怖を感じた。

見つかった。見つかった。見つかった。どうしよう！

どうもできなかった。同級生の指示を嫌々受け入れてきたように、
予想できる恐怖に疎み続けてきたように、ただ現状に必至でしがみ
つくしかできない。

彼は本当に、自分が臆病なのは知っていた。

「ごめん悪かったオレ本当はあいつらを止めたかったんだけど怖く
て止められなかったごめん許して許して許して俺が悪かったんじや
ない謝るから——」

もう限界だった。涙と鼻水と泡をたれ流し、彼は喚いた。絶叫し
た。無意識で謝り続けた。肺の中の全ての息を吐き出して、叫んだ。

彼の謝罪は、逆上と紙一重の逃避だった。相手が呪詛だろうが幽霊だろうが構わない。自分は謝った。悪いと思った。反省した。だから逃がしてくれ。見逃せ。だって、自分も被害者なのだ。

被害者同士、分かって欲しかった。分かるべきだ。自分だって怖かった、辛かった、嫌だった。誰にも言えないくて、なおさらキツかった。

今なら、死んでしまった涼湖りょうこになら言える。言ってもいじめは広がらない。分かってもらえる。だから。

叫び続ける彼の耳に、しゅる、と柔らかな音が届いた。自分の絶叫にかき消されて聞こえるはずのない、かすかな音だった。

後ろ？ と、彼はバツと振りむいた。

あるのはただのクローゼットの壁。暗くて狭い場所。充血した目を限界まで見開き、その壁を凝視ぎょうしした。

だが、いくら見てもただの壁だった。涼湖の顔も浮き出なければ、血文字が書かれているわけでもない。どこまでも、ただの壁だった。

「……」

ふと、そんな場所で膝を抱えて震える自分が滑稽こっけいに思えた。

しかも怪我をした足が熱を帯びた激痛を伝えて来る。涎よだれと涙を拭いて、とにかく一度外に出ようと彼は扉を開けた。

身を乗り出した彼の首に、ネクタイが引っかかった。

それが輪になっていると気付いた時には、体はもうクローゼット

から下りていた。首が締まった。しゅる、と頭上のポールでネクタイが柔らかな音を立てた。
咽喉のどが鳴った。

どうして。分かってくれたんじやなかったのか？

問いは、もう声にならなかった。幸か不幸か、頸椎けいついが見事にずれていた。酸欠よりも早く、生命活動が停止する。

さして丈夫でないクローゼットのポールが、彼の重みで折れた。だらりと垂れた体が、惨劇さんげきの後のような自室にすべり落ちた。白眼しうめには、目の前に散乱した小説は映らなかった。

白い獣は銀系のひげをひくひくと動かすと、目を細めた。

少年は臆病で、そして無知だった。

呪詛じゆそは一度発動したら終わるまで止まらないし、人の怒りは、周りがそうと知るよりも深いもの。どちらにしろ、逃れられるものはなかった。

——そう、まだ終わらない。

獣は右肢みぎあしを舐なめて、毛づくろいをした。そうして身軽に窓辺を蹴ると、その家から離れて走り去って行った。

21 「クララが立った！」あるいは「ウォーター！」（前書き）

ハイジとヘレン・ケラー

21 「クララが立った！」あるいは「ウォーター！」

高校生活三日目の朝、担任が出席を取っていた。

低血圧気味の間延びた声を聞きながら頬杖をついて前を見てみると、どうしても冬が視界に入る。

三村が言うように目で追っているつもりはないのだが、自分と教壇の間に彼女がいるのだからしょうがない。拳動不審を承知で、ぎこちない視線を向け続けた。

昨日の夜、山桜桃は七時半に帰って来た。

年齢からいって、常識的な時間帯ではあった。山桜桃には常識が備わっていないから、冬がそうしたのだ。

メールを打った後に山桜桃が返信をしなかったのは、話に夢中になっていて気づかなかったからで、電話をしなかったのは鬼灯の過保護ぶりを冬が知らず、胃に穴が開くまで心配されているとは思ってもよらなかったからだった。

説明されれば当然すぎて、ミラも含めた三人は脱力した。

今までどこか浮世離れしていた山桜桃は、現実の世界に焦点を合わせる事ができるようになっていた。

帰って来てから楽しそうに今日の出来事を兄に報告する様子は、平和な一般家庭と大差なかった。

『なにが普通なのか、どうしたらいいのか誰も言ってくれなかったけど、冬さんはわたしと同じ言葉で教えてくれたの』

言わなかったのではなく、言っても通じなかっただけ。

まどか達は内心こっさりそう思ったが、自分たちの方も、理解不能な感覚をもつ彼女の言葉が分からないのだから仕方ない。

山桜桃は鬼灯の腕を甘えるようにゆすりながら笑っていた。やるべきことを指示されて居場所を見つけた安心感が、少女に余裕を与えていた。

『感覚のチューニングの仕方を覚えたら、こっち側に集中できるようになったの。お兄ちゃんってこういう顔してたのね』

——って、今まではどう見えてたんだ？

三人で顔を見合わせた。

視力の低い人間がはじめてメガネをかけた時のクリア感を想像してみたが、何か違う気がした。『こっち側』があるなら、『あっち側』もあるのだろう。そこはまどか達にはさっぱり分からない。

『……山桜桃は同じ奴を探して、そういう技術を尋ねたかったんだ？』

『ううん。わたし、そんな事思ってたなかった。みんな混沌こんとんの中で生きてるんだと思ってたんだもの。冬さんに会いに行ったのは、同じ感覚で話ができるかもしれないと思ったから。こんな分かりやすい世界があつて、そこに混ざれる方法があるなんて知らなかった』

山桜桃は鬼灯の腕を放すと、ミラを真正面から見つめて、ぺたぺたと顔に触れて形を確かめ始めた。

『こっちはこっちで、あんたがそんな曖昧あいまいな世界を見てるとは思わなかったわよ』

『そうみたい。どっちも知らないと、自分と違う見え方があることに気がつかないんだって。だからわたしみたいに、チューニングすらしようとしないのも珍しくないって、冬さん言ってた』

ひととおり触れて気が済んだのか、山桜桃はまどかの前に来てテーブルの上にちょこんと正座した。座る場所が違うのは、彼女の氣迫おに圧おされて誰も指摘できなかった。

『お説教するから、静義さちぎも正座して』

指をさされ毅然つよ視線で促うながされて、まどかはソファの上に正座する。

『冬さんは変わっちゃったからダメって、話してくれないって、嘘。静義が傷ついてるのは分かったけど、だからって貶けなしていいことにはならない』

貶したつもりはなかったが、冬は冷たい人間だと思いついていたのは事実なので黙って怒られておく。そもそも山桜桃は、反論を受け付ける気はなさそうだ。

『冬さんはその方がいいから黙っててって言ったけど、わたしが嫌わたしは静義が好きだけど、拗すねてる静義は子供だと思う。わたしだって冬さんの本当は見せてもらえなかったけど、拗すねないもん！』

『こっちは年季が違う。ずっと頑張ってたのが裏目に出てたら、想ってた分だけ腹が立つんだ。分かれとは言わないが——』

つい言い返したら、山桜桃の目がすつと細められた。

現実との接点を見つけたのはいいが、いきなり人形が人間に変わったようにまどかは戸惑う。少女がはつきりとした表情を浮かべるたびに落ちつかない気持ちを味わう。

『まだ素直に謝らないんだ』

聞いたことのない口調。

『携帯で話した時、一番に謝っただろ』

『わたしにじゃなくて、冬さんに。いいもん。明日も会う約束してるけど、お兄ちゃんとミラは連れて来てもいいって言われたけど、やっぱり静義はお留守番！』

『なに？』

山桜桃が人の世界で暮らしやすくなるのは良いことだと思う。良く分からない感覚と折り合いをつける方法を学べるなら、それに越したことはない。

が、きっかけは自分のはずなのに、どうして一人だけ仲間外れになる？

思いだして、納得いかなくて、まどかは出欠の返事をする冬の後頭部を睨みつけた。

——こうなったら絶対にあとをつけて、山桜桃たちとの集ま

りに混ざってやる。

三村に注意されたにもかかわらずストーカーな決意をしていると、担任がぱたんと出席簿を閉じた。

「新学期早々こんな話をするのもなんですが、このクラスの山本さんは先日事故に遭^あって入院していました」

入学式にも来なかった理由はそれなのかと、まどかは斜め後ろを振り返った。

教室中がざわめき、座る者のいない机に視線が集まる。

「そして今朝、病院で息を引き取ったと、ご両親から電話がありました。クラス代表としてお葬式への出席と香典を――」

事務的な担任の冷静さは、生徒たちの驚きにあつという間に覆いつくされた。

21 「クララが立った！」あるいは「ウォーター！」（後書き）

いままで投稿時間が一定でなくてすみません。
これからは毎日午後5時に更新します。

22 ストーカー？

放課後、部活見学の誘いを断った冬が教室を出た。

まどかも追おうとカバンをつかんだが、その目の前に加賀森かがもりと白鳥が立ちふさがった。見失わないようにフェイントをかけて抜こうとしたら、さらに湊みなとと三村が邪魔をした。

「何」

ハンターの気迫で睨めにらばかなりの確率で逃げていくはずなのに、慣れている三村はおるか、加賀森も微動だにしないで見上げて来た。

「昨日女の子を泣かせておいて、まだ冬に声をかけようなんていい度胸よね」

「みーたーぞー。あのキレイな子は誰だ。迎えに来てくれる彼女がいるなんて、一言も聞いてないぞ」

ズルイズルイと悶もだえている白鳥と、完全に誤解している加賀森はさて置こう。まどかは比較的是なしの通じる後ろの二人に理解を求めた。

「あれは彼女じゃなくて、組んでいる仲間」

「ばれやすい嘘は、つかない方が何倍も得なんだけどね。あんな小さな子がハンターなら、最年少記録はあの子だろう。だけどそんな話は聞かない」

メガネのブリッジを押し上げつつ言うインテリ学生は、どこまでも理路整然りろせいぜんだ。

「山桜桃^{ゆすら}は仲間だけど、ハンターの資格は持っていない。一人では出歩けない不登校児で、危なっかしいからって保全局から許可が出てないんだ。代わりに、兄の鬼灯^{きちよう}に同伴許可証が出る」

冬はもう見えない。

だが山桜桃たちと会うと分かっている以上、探す方法はいくらでもある。まどかはドアから三村へと視線を戻した。

「その山桜桃に、冬が現実への適応方法を教えてるんだ。だから一回ちゃんと話をしたいのに、あいつ、一方的に避けるんだ」

話したい理由は違うが、嘘は言っていない。

嘘でない以上、三村の勘と理論は突破できるはずだ。

思った通り、ふうんと片眉を上げた三村と、ついでに加賀森の雰囲気が和らいだ。

「冬ってそういうの得意だから、引きこもりを何とかしてるのは分かるなあ。円城^{えんじょう}って、ボランティア関係の知り合いだったんだ？」

「いいや。違うだろ、恋だろ、二股だろ！」

「誰が二股だ！ まだ彼女の一人もいないのに、勝手に話を作るな！」

思わず本気で鞆を投げつけたくなかったが、ガマンする。こっちが冗談でも、白鳥に当たったら大けが確実だ。

「……彼女、いないんだ。江上さんもフリーだけど？」

「最大限の友情を希望するっ！」

超高速で耳まで真っ赤に染まって断言したまどかの勢いに圧され

て、湊がぽかんと口を開けた。

万言を尽くすより、今の一回で実感できた。

「分かったけど……。もしかして円城、恋愛ってしたことない？
オトモダチから始めましょう？」

あまりの主張の激しさに、加賀森がひき気味に尋ねる。たず

「うるさい。何だっていいだろ。もう行く」

子供のように不機嫌に、四人をかき分ける。

荒い足取りで廊下に出ると、予想した通り冬の姿は見えなくなっていた。ふん、とまどかは携帯を取り出す。これくらいでまけたと思ったら大間違いだ。

「北部二〇七番隊、静義。さやみプチッと緊急事態。忙しいところ悪いんだけど、山桜桃たちの居場所教えてくれない？」

「円城くん……。君ね、公共機関の私物化はダメだよ」

こんなことで国家保全局のGPS機能を躊躇なく利用したまどかに、同級生の呆れを含んだため息が向けられた。あき

22 ストーカー？（後書き）

短いですが、切りがよかったので。
かわりに、次は長めになります。

23 わいやーどらいふ

★

「改めまして、江上冬と申します。ご挨拶が遅れて申し訳ありませんでした」

場末の雰囲気^{ばすえ}がただよう店で、冬は丁寧^{ていねい}に頭を下げた。横には、満面の笑顔の山桜桃^{ゆすい}がいる。

「吉川貴朝^{よしかわたかと}です。登録名の鬼灯^{きぢよう}で呼んでいただければと思います。このたびは妹がお世話になりました。おかげで昨夜からずっと、あれは何これは何と、今まで興味を持たなかった物にも関心を示すようになった。感謝しています」

鬼灯も深々と頭を下げる。

高校一年生女子と大学三年生男子（彼は再々試験に受かった）の正式な挨拶は、あんたらどこの保護者会よソレと、ミラが内心つつこむくらいだった。

丁寧語が地の冬はともかく、つられた鬼灯の四面四角な態度は似合わないすぎた。

「あたしミラ。ねえねえ、さっそく質問いい？ 冬は山桜桃の感覚も分かるヒトなんですよ。何者？ あと、静義^{さやぎ}との関係とー、拒否した理由も教えて？」

ハイテンションで早口で問われて、冬はいつもの困った笑顔の仮

面をはりつけた。

ハンターが集う店で頼むには邪道だったココアを両手で持って、湯気^{ゆげ}を吹く。

隣の少女が同じ動作でまねをするのは、彼女が自分に、慣れない世界の案内役を割り振っているからだろう。

ココアは甘くておいしかったが、少女の信頼は苦い。

「答えにくい質問ばかりです。山桜桃さんにアドバイスした人間がどんな者か、ご家族が不安に思われないようにお会いしてみたのですが。答えられない事の方が多いと、却って安心できないかもしれません」

「ええと、できれば信頼させて欲しいなあと思います」

最初から手の内は明かさないと釘を刺されて、鬼灯は苦笑し、ミラは鼻白んだ。

「善処^{ぜんしよ}します。まず私が何者かという質問ですが、静義殿からはどう窺^{うかが}っているのでしょうか」

「野良犬を構ってくれた人間」

冬は、ぐらりと椅子ごとひっくり返るかと思った。予想外すぎてコメントのしようがない。どんな認識なのだろう？

「他は特には聞いてない」

つまり何も教えていないわけだ。

冬は額に指を当てつつ、気合いで立ち直ってみた。

「そうですか。本人が言いたくないことを私が言つのもどうかと思いますので、細かいところは省きましょう」

「コラ、端折^{はし}るな！。知る権利はどうしたー」

デモかストライキの参加者のように右拳を上げたミラの口を大きな手でふさぎ、鬼灯^{つなず}が頷く。

「私はいろんなモノが見えるんです。山桜桃さんも見えるみたいだったので、見えた物の処理の仕方のコツを教えてみました」

と、冬は自分の頭を指さしてみた。

視界はいままでと変わらないが、脳で視覚情報を処理する過程で少し意識をすれば、他の人間と同じものだけを取り出すことができる。

「あとは慣れていけばいいので、疲れない程度に街に出たり他の人と話をしたらいいですよ。ええと、次は」

静義殿との関係ですね、と思つたら、鬼灯がパタパタと横に手を振った。ミラが「違うだろーっ」と両手をテーブルについて立ち上がり怒鳴り、椅子が倒れる。

「……あの椅子、直してもらつてもいいですか？」

きょとんとしている山桜桃に笑顔で頼むと、少女は元気よく飛んでいつて椅子を立てて戻つて来た。

いい子ですね、と頭をなでると含羞^{はにか}んでうつむく。

「そこ！ ほのぼの空間作ってんじゃないわよ。あたしは山桜桃に何を教えたか訊^きいたんじゃないわよ、あんたが何者かって言つてんの！」

そういえば、そうだった。

すっかりしました、と冬がへにやりと笑うと、ミラはギリギリと歯ぎしりをしながら席についた。

「悪いんだけど、その天然どうにかしてくれない。あたし、ズレるのとボケるのとわけ分かんないのが嫌いな」

「ミラ短気だから」

気にしないでと山桜桃がにつこりしたので、彼女はますます歯ぎしりをして腕を組んだ。人間はげっ歯類じゃないんだから歯がすり減りますよと思ったが、言ったら更にひどくなりそうだったので止めておく。

「でも、何者と問われても困ります。色々見えて、多少おせっかいなので、色々面倒事に巻き込まれるだけなんですけど。妖獣退治はなりゆきで」

「ど・う・やつ・て！」

バンバンとテーブルを叩きながらミラが訊く。ココアがこぼれないように、カップは手に持ったままいるしかない。また真似をしている山桜桃を横目で見て、飲み物は常に持つという間違った認識ができないと良いなあ、と思ったり。

「一昨日は手近にある棒で突きました」

「固いでしょ妖獣！ あんたみたいな細腕で突いたくらいでどうにかなるか？」

「なりますよ。——あ」

カランと鳴った入口のベルに振りかえると、全力疾走して来たま

どかが息を切らして入って来た。

「時間切れですね。では私は、これで失礼させていただきます。静義殿によりしくお伝えください」

「逃げんな！」

飲みかけのカップを置いて冬が伝票を持ってレジに向かうと、怒りのこもった目つきでまどかがつかみかかって来た。身をかわしてひよいと避ける。制服のスカートが翻る^{ひるがえ}。彼が冷静ならできない芸当だが、逆上している今なら簡単だった。

「ところで、私は静義殿のこと友人だと思ってました。わんこじゃありません」

ぴた、と彼が動きを止めた。

瞳が迷うように揺れた。

「……だったら、もし本当にそうなら頼みがある。この近くの神社で同級生が自殺した。嘘か本当かは知らないが、そいつの呪詛^{じゆそ}で二人死んだって聞いている。もし涼湖^{りょうこ}が呪いをかけたなら、そんなのは残って欲しくない。解除してくれ」

「いいですよ」

神社の呪詛は、昨日見た。

山桜桃が泣いていた境内に、濃すぎる怨念を残していた。

目立つのは困るが、あれくらいならぎりぎり見つからない範囲で成仏させられると思う。冬自身も気になっていたので、このタイミングは『やっちゃえ』という世界からのゴーサインだ。———そ

う、ムリヤリ解釈してみる。

あっさり頷いたら驚かれた。息をのむ音。

「今でも、できるんだ……」

惑^{まと}う声。信じたいけれど、一度拒否されたために信じきれない感情が手に取るように分かった。

そんな顔をしないで欲しかった。大丈夫と請^うけ合いたかった。今も本当は、友人でいたかった。でも、だめだ。

冬は制服の胸元をキュツとつかんで、いつもの笑顔の仮面をかぶった。

「そのかわり、もう話しかけないで下さいね」
絶望が相手を染めるのを見たくなくて、冬は踵^{きびす}を返すと、素早く会計を済ませて立ち去った。

*

24 転（前書き）

起承転結の、転です。

「江上冬っ！ あの子も静義さやぎも、どうしてこうなのよ？ ハッキリしないとスッキリしないって言ってるのに？」

バンバンバンとテーブルを叩く音が店に響き渡ったが、荒事が日常なハンターはそれくらいは気にしない。客はみんな自分の話を続けている。

「おじさん、レミ・マルタンをストレートで！」

途中からキれていたミラは、コーヒーのおかわりではなくブランデーを注文した。

「静義と一緒にいるのがダメだからって、話の途中で切り上げることないじゃない！」

「あと、大きな魔法や詠唱の近くにもいるのもダメなんだって。だからわたし達ともあんまり会わないって、昨日言われた。今日は特別におまけだったの。なのに、終わっちゃった」

残念そうに肩を落とした山桜桃ゆすらを、兄がなだめている。

まどかはコーラを飲みながら入口を見つめた。

自分といるのも、目立つのも、大きな魔法も詠唱もダメ。

でもそれ以外なら、山桜桃にもレクチャーするし、妖獣も退治するし、呪詛じゆそも解く。その差はたぶん、使う力が大きい小さいかだ。

「預かり物って何か聞けたか？」

「全然。あの子、ごまかす気は無かったのかもしれないけど凄く天然で、横道にそれるわミラは怒るわで、そこまで話が進まなかったんだ」

「そっか……」

友人だと思っていた、と冬は言った。彼女は笑顔の仮面をかぶり拒絶の言葉をつむぐが、あの時は素だった。空虚ではなかった。

まどかはコーラを一気飲みすると、席を立ててコートを羽織った。

「来たばっかでもう帰るの？」

「預かり物がなんだか、訊いて来る」

使う力が小さい時の選択は、昔と重なる。

もしそれが本心なら。友人だと思ってくれていたなら。

『面倒くさい預かり物』をどうにかしたら、ほんとうに冬は前みたいになってくれるだろうか？ あ的笑顔を向けてくれるだろうか？

店の外に走り出ると、山桜桃が追いかけてきた。もっとも、少女は足が遅いので、すぐに飛びだして来た鬼灯に追い抜かれた。

「急がなきゃならないのか？」

「呪詛を被つたら、話しかけるなって言われた。だったら被う前に自分で訊いてみたい」

まどかは涼湖が自殺した神社へと急いだ。

消えない彼女の嘆きは、まだ胸に刺さっている。

『人ならざる者の声を聞く者』——

冬もそ

『巫女は、他の人とは同じになれない』——それでも『冬』は誰より他人と共にいた。

山桜桃でさえ人の世が見えた。ならばそこまで酷くなかった涼湖なら、もっと救われたはずだ。だから——

他人と同じではなくても、共にいられると言えはよかった。どうして涼湖の事が忘れられないのか、気になってしまつかは分かっている。

後悔だ。

まどかはどうしたらいいのか知っていたのに、彼女が自ら死を選ぶまで何もしなかった。その慙愧ざんきの念がどうしても消えない。

優しくないと決めつけた冬は、山桜桃の話を聞いて導いたのに。自分は昔から変わらない。

善人になりたかったわけじゃない。ほんの少しだけ、誰かのためになりたかっただけ。なのに、それすらできない。保身が先に立つ。

本当は。

『冬』みたいになりたかった。

絶望の人生の最後に思いだして、辛くても悪くなかったなと苦笑をもたらせる人間に。

25 推理物なら、「犯人はおまえだ！」的な

「冬！」

神社に駆け込むと、ふわりと桜の淡い花びらが散った。

後ろ姿はあまりにも小さくて、記憶の中の『冬』とはまったく違うのに、大ぶりの銀杏いちょうの木を見上げる姿勢がそっくりだった。ナニ力を見つめる表情は、笑顔の仮面を忘れている。

「冬」

「こんなになってしまつて……。すみません。一日で被害者が三人も増えてしまった。理ことまで越えて……。こんなことなら昨日のうちに成仏させてあげれば良かったです」

彼女は銀杏に向かつて手を合わせていた。

謝っているのは、頼んだまどかではなく、そこにいるナニカに對してだ。

やっぱりいたんだ、とまどかは立ちつくした。

「オレ、そいつを救えるはずだったのに、無視したんだ。ここにも何回か来たけど、見えなかった。贖罪しよくざいなんて思わないけど、せめて助けたいんだ。オレに出来ることはないか？」

冬は睫毛まつげを伏せて首を振った。

それからまどかを追って来た三人を、す、と指さす。

「境内に入らせないで下さい。特に、山桜桃^{ゆすら}さんは絶対に。山桜桃さんは綺麗な水晶ですが、簡単に変質します。涼湖^{じょうこ}さんがこんなになつてしまった今では、来たら反応します。煙つてしまう」

「……。やつぱりお前らの言葉は分かんないが、とにかく入んなきやいいんだな」

まどかは三人を敷地から下がらせて、振り返る。

「あのさ、預かり物って何」

「内緒です」

「それじゃ困るんだ。オレは『冬』の性格が気に入ってるんだ。お前がやりたいようにやって、仮面なんか取ったら、それだけでいいんだ。だから、預かり物をどうにかしたら」

冬は以前話した時と同じように、人指し指を額にあてて考え込んだ。ため息をついた。

「……やつぱりダメです。この話はどこまでいっても平行線で終わると思います。やめましょう」

有無を言わさぬ強さで切り捨てると、冬は銀杏の幹に手を触れた。「頼まれた被^ひいですが、呪詛^{じゆそ}ではないんです。涼湖さんって、やり方は知っていたのですが力がなくて呪詛は発動しなかったんですね。代わりに、墮^おちた魂の跡が残っています」

神社に残っていたのは、呪詛ではなく、自殺した少女の霊。

涼湖本人。

まどかは頷いたが、ミラは半信半疑で目を細めたりしている。

その様子に、山桜桃は鬼灯きぢょうとうの手をすり抜けて駆け寄った。

「冬さんは間違わない。きつといるんだよ。わたしも見る。お被い、手伝う！」

「ちよつと待て？」

慌ててまどかが捕まえた時には、水晶と評された少女は境内に足を踏み入れていた。

「い」

途端に少女はびくつとして、がくがくと震えだした。

「嫌

っ？」

甲高い絶叫を上げてまどかを突き飛ばした。普段の山桜桃からは想像もつかない力で、思わずよろける。

もの凄い拒絶かくぜんだった。

まどかが愕然がくぜんとしていると、鬼灯が抱えて外へ連れ出そうと動いた。

「いや——っ、やめてやめてやめて？」

だが山桜桃は、全力で暴れる。兄の腕に噛みつき、ひっかく。あつという間に鬼灯の頬や手に血がにじむ。

「何なの？」

長い黒髪を振り乱して叫び続ける少女に驚いたミラが、唯一説明のできそうな冬に詰め寄った。

「……だから入らないで下さいってお願いしたんです。水晶は、過去も未来も映します。山桜桃さんくらい何にもないと、映ったモノに引きずられるんですよ。涼湖さんもそうしたがってますし。今彼

女は、ここで自殺なさった方の記憶と恨みを、追体験してるんです」

——自分が確立できていない人間は、簡単に霊に取りこまれる。

そういう事だ。理解して、まどかは顔色を変えた。

霊感少女を自称していた涼湖は、彼女を不愉快に思っていた女子グループにひどいことをされたと聞いた。彼女たちは、一緒に遊んでいる男たちに涼湖をレイプするよう頼んだのだと。

それを、追体験？

「山桜桃っ！　しつかりしろ、お前は山桜桃だ。学校に行ったこともないだろ！　自分と他人を間違えるな？」

必死で叫ぶまどかの声も聞こえていないようで、少女は悲鳴を上げながら自分の髪をつかんでひっぱっている。ぶちぶちと音を立てて抜ける漆黒の髪にぎよつとした鬼灯が、山桜桃の手をつかんで止めた。

ハンターして大刀をふるう兄と、狂乱の馬鹿力で暴れている妹の力が拮抗した。

「……呪詛は成立しませんでした。あなたが霊となって脅すことを、呪詛とはいいませんからね」

冬は銀杏から手を放し、山桜桃へと一歩踏み出した。

「冬？」

「私も追体験させられましたから、見えました」

まどかは思わず顔を歪めだが、冬は山桜桃とは違って自分と他人

を混同したりはしていない。精神科医は患者の痛みを分かち合うが、同調はしない。

同じになってしまったら救えないと知っている。

「殺し方も見えました。——あなたが恨み言を連ねたら、女の子四人と男の子一人が錯乱さくらんしましたね。罪の意識に耐えられないほど責めて、自殺の形へと追い込んだ。そしてもう一人は」

「って、待て。死んだのは安部たちだけじゃなかったのか」
『関わっていたのは、全員殺すわ』

涼やかな声が答えた。

25 推理物なら、「犯人はおまえだ！」的な（後書き）

わかりにくかったら、感想でつぶやいて下さい。
って言っても、次も解説がつづきますが（^^;）

26 転々：ひょーい。(前書き)

タイトルだけでもコメディで行こうと思ってるんですが……。
ナニカ違う……。

26 転々：ひょーい。

『関わっていたのは、全員殺すわ』

錯乱さくらんの収まった山桜桃やまおうとうが、薄紅色の唇あざけに嘲あざけりを浮かべた。

鬼灯きちようとミラがぎよっとして少女を見つめる。冬は、困ったように眉尻まゆしりを下げた。

「そろそろやめましょう。皆さん保身しかできない方々でしたけど、でも、彼らなりに反省していたじゃないですか」

山桜桃——涼湖りょうこは鬼灯の手を払い、すっと立ち上がった。

冬の正面まで来ると、傲慢ごうまんでさびしい表情を浮かべて、わざとらしく乱れた黒髪をかき流す。

『だから何？ 頭にくるだけだわ。悩んでるような顔をして、自分も被害者面をして、それでもものうのと生きてるんだもの。本当に悪いと思うなら、死んでくれればいい。それさえできないなら、狂えばいい。狂人になったなら、優しく導いてあげるわ』

涼湖はうつとりと笑い声を立てた。

冬は彼女をじっと見つめた。

一番先に諦めたのは、まどかだった。

思い直して自ら山桜桃から離れてもらうのは、不可能だと悟った。冬も、遅れてため息をついた。

「どうしても殺すんですね。——山本さんのように」
「山本って」

教室の空席。

「今朝お亡くなりになった方です。彼も犯行に加わっていた。そして山本さんは、霊の脅しに屈する人ではなかった。だから涼湖さんは、近くを通った車の運転手を利用し、アクセルを離せないようにしたんです。山本さんを轢き殺させた」

彼女の自殺は呪詛でなく、祟り。

冬の言う事がまどかにも理解できた。怨念は呪詛ではなかった。すべては怨霊となった彼女が、自分でやっていたのだ。

『イイ気味。でもまだ六人ね』

ちらりとまどかを見上げた山桜桃は、確かに涼湖だった。そこに宿るのは悲しみでも恐怖でもなく、怒りだ。自分らしくしましようと言いながら、ほんの少しの逸脱さえ認めない社会に対する怒り。

『わたしは全員に復讐するまで、成仏なんてしてやらない。あいつらを確実に殺すために自殺してやったんだもの。分かるでしょう？ 彼らのせいでわたしは巫女の資格を失った。きっと呪詛が成らなかったのもそのせい。無理に被うなら、この子の心を引き裂くわ。それが嫌なら、邪魔しないで』

まどかは思い違いに気付いた。

涼湖は恥辱を感じて嘆いたのではなく、復讐の手段として自殺したのだ。

自分では彼女を救えなかったのだと、唐突に理解した。

正しいか否かは別にして、彼女の自覚と誇りの前に、面倒を避けるために沈黙を薦めるまどかは無力だ。自ら人の理をはみ出てなお、信念を曲げない涼湖を説得できるわけがない。

「他人を巻き込むのはやめましょう。罪をこれ以上増やすのも。ご自分のしたことが分かっていますか？ 自殺しなかった山本さん以外にも、被害者はいるんです。あなたが殺したのは、七人。あなたは、いつの間にかあなたをいじめた人たちと同じモノになってるんですよ」

『いいえ、六人よ。女が四人、男が二人。わたしはあんな低俗なものと同じになてならない。ねえ、正しくない人間に裁きを下して何が悪いの。そのために出来ることをして何が悪いの！ 放っておいてくれたら、この子はちゃんと返すから！』

山桜桃のあどけなさとはかけ離れた、怒りを隠もしない姿。もはや醜悪というより痛々しかった。まどかは顔をそむけ、冬に救いを探そうとした。

冬なら山桜桃も涼湖も助けてくれるはずだ。

だが彼女は、覚悟を決めた厳しい調子で指示を出す。

「すみません静義殿。残念ですが、もう遅いんです。罪を犯した魂を天上へ送ることはできません。彼女は償わなければ。ですが、山桜桃さんは助けます。二人を分離させますから、そしたらすぐに安全な場所に連れて行ってください」

まどかは自分の甘さを痛感した。

どうやっても、無理は無理なのだ。まっ青な顔でうなずく鬼灯に

ならって、いつでも動けるように構えをとるしかない。

『嫌よ！ この子がどうなってもいいの？ わたしが負を砕くのは神意にかな適う行いなのに！ 邪魔をしないで？』

「……あなたが自分で裁きを下せたのなら、そういう言い訳もできるかもしれません。ですが、あなたは復讐に他人を巻き込んだ。もう、理はありません。——七人目、あなたの罪はそこに」

す、と冬は指をさした。

涼湖がバツと見上げると、中空にわだかまる闇があった。

26 転々：ひょーい。(後書き)

やっぱり分かりにくいですか？

すみません。実は説明が苦手です。

質問いただければ、そのつどお答えします。

27 嵐とかいてテンペストと読む。(前書き)

ホラー入ってます。

スプラッタ入ってます。

でも今回ばかりは飛ばすと話がつながらなくなります。ごめんなさい。

少女は何度も叩いた。べしゃり、ずるり。べしゃり。滴^{したた}る血が叩かれて飛び散り、死者の皮が垂れた。

それでも運転手は彼女を放さない。決して放さない。

痛みではなく恐怖で、少女は絶叫した。

どくん、と闇が、ひとつ脈打った。

「気が、済みましたか？」

『済むもんか！　なんでオレだけ死ななきゃなんねーんだよ』
その瞬間、闇が爆発した。

「……なんで皆さん、引き際^{ぎわ}を間違えるんでしょうね……」
冬がため息をついた。

二人分の怒りと恨み、なによりも強い心残りが弾け飛ぶ。
黒い嵐が吹き荒れ、神社の木々を揺らした。葉が飛び、土が舞い上がり、しめ縄が揺れる。片隅にあったブランコの座面がちぎれ飛んで、冬の足元に突き刺さった。台風以上の暴風だ。

「おい！」

叫んだまどかに、ぐったりとした山桜桃の体が押し付けられた。
「安全な場所に」

指示を思い出して鬼灯たちと共に走り出したが、どうしても気になつてまどかは振り返った。

神社いっぱい大きく濃く成長した闇は、もはや運転手でも少女でもなかった。

——怨念の塊。

「何なのよもう！　こんなのにヒトの意識なんて無いわよ？　手に

負えない、早く逃げようってば」

わけの分らないモノが大嫌い、と常日頃言っていたミラは、幽霊話も嫌いらしい。恐怖から逆ギレしている。

鬼灯も彼女が倒れこまないように支えているが、その彼としてもこんな超常現象は初めてだ。必死に風圧に耐えている。

「二人で走れっ！」

まどかは抱えていた山桜桃を鬼灯に渡すと、走った。風に逆らって、闇の濃い中心部へと向かう。

「冬、大丈夫か？」

「もうっ、バカ男っ！」

ミラはブチ切れて叫んだが、すぐに意識を切り替えた。魔法呪文スベルを叫ぶ。

風を操る術。

それは発動したが、黒い嵐は止まなかった。

「ムカつくっ！ でもちよっとは効いてんでしょ！」

さらなる呪文に重なって、細い詠唱が響いた。

抜ひいの詠唱だった。山桜桃だ。意識を取り戻した彼女は、真っ青になりながら、震えながら、それでもなんとか声を張り上げている。

闇がわずかに揺れた。

だが、それだけだった。嵐は止まず、今度はブランコの支柱がまわること飛んできた。

「くそっ」

鬼灯は妹とミラを両脇に抱えると、横に大きく飛んだ。否、本人いなはそのつもりだったのだが、嵐に巻き込まれて斜め後ろに飛ばされた。

かろうじて二人を背にかばうと、腕をふるう。足が地面にめり込む。

「っらあっ？」

気合いと共にね返すと、重すぎる凶器フランクは桜にぶつかって落ちた。

鬼灯は荒い息をついた。そしておもむろに両手をクロスして掲かげると、一歩も退かない姿勢で構える。次々と飛んでくる小石や枝が、彼にぶつかってはね飛んでゆく。

「みんなは逃げろっ！」

まどかが振り返ると、ミラが八つ当たり気味に叫び返す。

「あたしだって逃げたいけど、外からやるより中からの方が、ダイレクトに効くんだから仕方ないでしょ？」

強風にあおられた金茶の髪がバサバサと乱れ、形相とあいまって本物の鬼のようである。コワイ。まどかは思わず首をすくめた。

「冬、お前これどうするつもりだ」

「もちろん被いますが、どうして避難してくれないんでしょう。とつてもやりにくいんですけど」

状況を無視した平静さで答えられて、まどかはプルプルと両手を握りしめた。

「被えるなら、さつさと経でもあげてやれよ！　そんで成仏させとけ？　こんな、わざと怒らせて暴走させてどうする気だよ！」

「わざと暴走させたというのは誤解です。山桜桃さんから安全に霊をはがしたかったです。それに、静義殿、覚えてないんですか？　お経は霊を諭すためのものではありません。色くろ即そく是ぜ空くう、空即くう是ぜ色しき——形あるものも目に見えないものと変わりなく、目に見えなくても存在しています。死者は失われたわけではなく、見えなく

ても存在しているんですよーってというのがお経の意味です。お経とは、この世に残された人たちを慰めるための言葉だと、以前申し上げたような気がするんですが」

「この期に及んで、仏教学とかどうでもいいっ？」

ぎろりと睨みつけると、へにやつと清廉な笑顔を返された。仮面ではない、冬の素の笑い方だった。

まどかが一瞬ひるんだ時には、冬は闇の中心に向かって微笑んでいた。

「同情はするんですけど、あなた方、他人に迷惑をちゃダメですよ。やりすぎ禁止です。あの世で怒られてきて下さい」

しゃらん、と音がした。

風が凄いにも関わらず、それでもなお澄んだ響き。冬がずっと手を伸ばすと、制服の袖近くから銅色の何かが飛び出した。全体が引き抜かれると、枳杖だとわかる。

上部に取り付けられた環が重なり合い、ぶつかり合って鳴る、繊細な音色。

くるりと枳杖を回すと、冬は石突きを地面におろした。途端に響いたのは、それは音というより、甘やかな振動だった。

魂を揺さぶる音色という表現があるが、その時の音は、どうしもうもない絶望と苦しみと怒りを抱えた少女と運転手の魂に確かに届いた。音は幾重にも重なり、波紋を広げ、力を広げ、原初の色を共振させた。

人生のすべてを振り落とした、最初の魂だけが残った。
それしか残らなかった。

闇も黒い嵐も消えた神社で、冬はまたへにやつと笑った。
「行って、反省してらっしゃい。たいへんな時期かと思いますが、
そこは自業自得という事で」

残った小さな魂たちは駄々をこねるようにその場でくるくると円
を描いた後、ふ、と消えた。

28 だつと。

まどかは清々（すがすが）しい気分で、冬にデコピンした。

「お前なあ、その技できるんだつたら、さつさと披露ひんぎしろよ。そしてたらオレだって、お前が薄情者はくじやうに変わったのかつて迷わなくて済んだのに」

魂に直接働きかける冬の技は、今も昔も変わっていなかった。

断罪ではなく、正誤を教えるのでもなく、ただ、生きるために生きる最初の意識を思い出させる。それは、冬の優しさと遠慮えんごなのだと思う。

その時、罪人の魂の多くが記憶を振り落とす。
切ないが、忘れなければ許すことのできない恨みというのもあるのだろう。記憶したまま許せるような人間なら、そもそも怨霊になどならない。

恨みを手放すところまで導かれただけでも、彼らには救いなのだ。

「迷っても疑わないのが、さすがです。ところで
言った冬は、周囲を見回した。」

立ち尽くしている鬼灯きとう。ぽかんとしているミラ。震えて兄の後ろに隠れている山桜桃やまおうも。

そして、片方切れてだらりと地面についているしめ縄に、地面に

突き刺さった破片。ふっとんで倒れているブランコと、その下敷きになった桜の木。

「私、あるものを預かってるって言いましたよね」

「ああ。でも、今どうしてその話？」

嫌な予感がした。

「静義殿しやぎだんといると目をつけられるとも。同じように、こついう大技を使うと、預かり物を探してる方に見つかっちゃうんです」

「……それって」

「ええ。桜の結界も神社の結界も破れてますから、真夜中の花火くらい目立ったんじゃないでしょうか。じゃなかったら、生クリームのだ真ん中に一粒だけある苺くらいに」

まどかも周囲を見回した。

「なんで苺シヨートの例え。まあいいけど。来るなら、やるけど」

目をつぶれば、どこからか『違う』気配が近づいて来ていた。

津波のような音までする。

「山桜桃、被ひいと能力増強の詠唱を頼む。鬼灯、ミラ、大物が来るぞ。覚悟しとけ！」

「そついうわけで、これ、お貸しします」

のほほんとした声に目を開ければ、冬が大気から剣を作り上げたところだった。

「なんだあつ？」

渡されたのは、むかし自分が使っていた剣と作りも飾りも全く同じものだった。鐔つばに刻まれた瑕きずまで、寸分違わぬ場所にある。

「今の私作ですから、妖獣なら一刀両断できます。――――抜けるなら」

意味深長に言われて、まどかは眉をしかめた。

理解は追いつかないが、自分用に出された物を使えないのは無能みたいで嫌だ。

「ごくりと唾を飲み込んでから精神を研ぎ澄ませる。ぴたりと手に馴染む感覚は懐かしく、まどかは知らず、微笑ほほえんだ。

音もなく、白刃が現れた。

「さすが静義殿。じゃあよろしく願いますね」
ふにやっと笑った冬は、ひらひら手を振ると

――――脱兎のごとく神社から逃げ出した。

「ちょっと待てい？」

「一人で逃げるって何よ！」
ミラも叫ぶ。

「あ、そうだ。白いハムスターを見つけたら、山桜桃さんには絶対に近付けないで下さい」

「何だそれ！」

思わず吼^ほえたまどかに、緊急放送のサイレンが直撃した。

『北地区D区画より複数の妖獣が侵入っ！ 現在北地区にいる全員に、強制避難が発令されました。最寄りの指定場所に集合してください、順次南地区に搬送を開始します！』

「うつそだろ」

どんな妖獣が侵入して来ても取り乱したことのない保全局の放送担当者の声が、上ずっていた。

しかも内容が尋常ではない。

妖獣の種類と数を言わないのは、カウントを諦めるくらい複数だからだ。

一つの地区をまとめて避難させるなど、未だかつてない事態だった。

「なんだこのタイミング」

「『冬の預かり物を狙って来た』に一万！ 何なのよもう！」

「ミラ……賭けをしている場合じゃないと思うの」

「それより俺の大刀も作って欲しかった！ 手ぶらでどうしろってんだよお？」

大騒ぎをした四人はそれでも、まっすぐ神社を襲撃して来た妖獣を全力ではり倒し始めた。

28 だつと。(後書き)

2 章終了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4045y/>

問い「探しものは何ですか」 答え「転生前の友人です」

2011年12月3日17時14分発行